
浮生夢のごとし

笹ヶ根伊都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮生夢のごとし

【Nコード】

N5075F

【作者名】

笹ヶ根伊都

【あらすじ】

環は18歳。大学生活を始めるにあたって山陰の小さな市に越してきた。新居となった失踪した叔母の家には、春日と大童子という化生が住み着いていた。大童子の本当の姿を探し、叔母を見つけることができるか！！（という流れになる予定）『その公国』がシリ阿斯なので、少し笑いを入れました。いよいよ、大童子の白刃がうなります。

弥生のこと。春日と修羅

初めてその女を見た時、右手に握り締めた刃が小さく鳴った。
怖いんじゃないねえ。もちろん、寒いんでもねえ。

武者震いだ。

そして初めて狂気から覚めて、俺は返り血を浴びた自分の姿を恥じた。

俺は知った。

こいつは俺の運命を示す女だ。

俺には、もう何も残っちゃいない。

俺は俺自身が何者かすらもう分かっていない存在だったから。
斬って斬って斬りまくって、その返り血でどうにか自分の輪郭を刻むようなそんな存在。

守る者も欲しい物ももうないと思っていた。

そう信じていた俺に再び歩き出すための道を示してくれる女。

俺が何者で、何をし、何処へ行くのか、その答えを与えてくれる女。
それがお前だった。

ねえ、たまちゃん。

そう言って私の手をとったのは、5年前にいなかった美しい叔母。
いつもこんなふうにかちんと着物を着てたっけ。

たまちゃん、本当はとっても目がいいの。

おばちゃんね、目隠ししてたの。耳もふさいでたのよ。

でも、もうこの手はずすね。

おばちゃん？なに言ってるの？

あの子達と仲良くしてね。

誰と仲良くすればいいの？ぼんやりとした意識で私は尋ねる。

大童子と春日。

叔母がそつと立ち上がる気配がした。

どこいくの？おばちゃん。

私は手を伸ばす。だけど、

鼻がつーんと冷たい。

あなたとあの子達が、手を伸ばしてくれたらその先にあたしはいる。
大童子の本当の姿を探してあげて。

おばちゃん？

去っていく気配がするけど、私の体はまだ眠っている。

何の音もしない。

何の匂いもしない。

ああ、そうだった。

寝返りをうつ。

引越してきたばかりの家で迎える朝は、匂いも音もどこかよそよそしい。

でも、昨日の疲れが抜けきらない。

そういえば、荷解きを手伝いに来ていた三つ年下のいとこが言った
つけ。

「こんなとこに住みたい気が知れないよ。僕なら眠れそうにないね。
いろんな物がうようよ居過ぎて。」

別にムカデも、ゴキブリも出なかった。

ってか、今冬だし。怖がりな奴。

寒い。鼻先が冷たい。

もう一度、布団を鼻先まで引き上げて、寝返りを打つ。

そのとき、頭上で少女の声がした。

「で、どうするね。この餓鬼。」

「んー、まあ、俺達、見えてねえようだし？いいんじゃない？」

男の声。ん？男？男だと？

「それは、駄目だね。私にもプライバシーーってもんがあるわね。」
まだ幼さを残す少女の声が、少しとがった。しかも、出雲弁だし。

「へー、おめえみたいな餓鬼にもプライバシーーってもんがあるんだ

「。おじさん、知らなかったなあ。」

いや、棒読みだし。

「当たり前だわね。そうでなければ、このあたりの家に祟って、片端から追い出したりしないわね。おっさん。」

いや、なんか。本当はこの家、私しかいないんですけど。その前に祟るって何？

「そんなことだから、この家、幽霊屋敷ってよばれんだよ。そこんとこ分かってる？」

「幽霊が主の家は、幽霊屋敷に決まってるわね。」

幽霊？幽霊ってなに？あれ？私、完全に目を開けるタイミングを失ってる？っていうか、この家の主は私なんですけど！

動揺するも目を閉じたままの私の頭上で少女の声は続く。

「大ちゃん、考えてもみる。女は口やかましい生き物だわね。『どうして、私の歯ブラシつかうの！』とか、『なんで私の話をもっと聞いてくれないの！』とか『靴下は、ちゃんと洗濯用の袋に入れて！』とか毎日毎日お母さんみたく言われてみる、こっちが参ってしまうがね。」

つか、それどんな、シュチュエーションだよ。

「無理！ぜってー、そんなの無理。ってか、それお母さんじゃなくて、奥さんだから。」

「でしょ、でしょ。じゃあ、やるしかないわね。」

少女がはしゃいだ声を上げると、男が懷から何かを取り出したようだ。紙を広げるような音がする。

「てーと、どうする？狐火グリルコース、わら人形串刺しコース、油澄まし釜揚げコースと。」

「私は最近、油ものはいらないね。」

喰う？喰う気なのか？この私を喰らう気か？

思わず飛び起きる。目の前に半透明の男と、同じく半透明の少女の驚いた顔がある。

男は肩から蜘蛛の巣がかかった模様の紺の半纏に、赤穂浪士が着て

いるような火消し装束。そして腰に刀。少女は色が白くつややかな黒髪が肩まで。赤い着物は可愛らしい容貌に映え、いかにも座敷わらしといったようないでたちだ。

その二人が私の顔を見て、同時に言った。

「おはよう」

いやっ。み、見えない。私はなにも見ていない。知らない。絶対認めん、こんな世界は。

私、日下 環はめでたく大学に合格し、新生活を始めるともりでの山陰の小さな町にやってきた。

これまでが母と娘の親一人子一人の暮らしで、日中に限って言えば自分の世話は自分でして来た。

それだけに一人暮らしは不安だが、どこか新鮮味とは程遠い。

この古い日本家屋は五年前まで私と十三歳違いの叔母が暮らしていたが、五年前のある日突然『この家の名義を環に書き換えてね』という書置きを遺して、失踪してしまった。

叔母は民族学だの仏像だのに造詣が深く、私大の助手でもあったし、小説家でもあった。

今年、私が高校を卒業するタイミングで母が再婚した。

私はよく知らないその人と一つ屋根の下暮らすのがいやで、叔母が遺してくれたこの家で新生活を始めようと、受験する大学も選んだ。卒業式が終わると同時に、越してきたのが昨日。

それが赤の他人、それも化け物と同じ屋根の下暮らすことになるうとは。

この日まで想像だになかった。

湯を沸かしながら、背後をうかがう。

どうしよう、どうしよう。

この18年と6ヶ月、一日たりとも幽霊の存在など認めた日はなかった。祖母や叔母達はいろいろ見えるだの聞こえるだの言っていたが、母の代からこちらに遺伝してこなかったはずだった。

いまさら、この志を曲げるわけにはいかん。

この後続く大学生活を考えると、絶対にいかん。

「ぜってー、俺らのこと気付いてるって。」

「この鈍感女、絶対私たちに気付いてないわね。」

まだぬるいテンションで言い合っている二人を放置。

見えない、聞こえない、何にも知らない。

食器棚からコップを出して、とりあえずインスタントのコーヒーを飲もう。この悪い夢が覚めるかもしれない。

「インスタントのコーヒーってコーヒーでないさね。」

「いや、缶コーヒーよりはましだろ。あれは、コーヒーじゃねえ、豆ジュースだ。」

いや、そんなのどうでもいいから、ほんとに。

炊飯器が現実感に満ちた音を立てて、ご飯が炊き上がる。フライパンを温め、油を人さじ、目玉焼きを焼く。焦げ目が付いたら裏返して中身はとろとろ回りはこんがりの目玉焼きの出来上がり。鰹節とゴマと海苔をのせた炊きたてのご飯に、焼きたての目玉焼きを飾る。これにしょうゆをひとさし。ネギがあれば最高だが、昨日越してきただけなので、冷蔵庫はまだ空っぽだ。

「あ、あのにゃんこめし、美味しそう。」

にゃんこめし？ぴくりと私の眉が動く。

「俺、あれ喰うわ。あのにゃんこめし。」

なんだ、貴様ら。人の好物を。卵ご飯・環スペシャルをにゃんこめしだと？

私は取りかけた箸を置き、食卓の椅子をひいて立ち上がる。

ちゃっかり席に座った二人が見計らったようにどんぶりに手を伸ばす。すると不思議なことにどんぶりから半透明のどんぶりが分裂する。

もういい。

あるがまま受け止めてやるよ。

「いただきます。」

ご機嫌な二人の声を背に私は嗜虐的な気分で奥の間に向かう。あそこには、叔母が遺したブツがある。

よかろうとも、下賤のやからども。そうして安穩としているがいい。目に物見せてやる。私を愚弄した罰だ。

私は奥の間に行つて壁に掛けてあるブツをとってきた。袋をはずして、食卓を囲んでいる二人の間に叩きつける。

薙刀の切っ先がまだ中身の入っていない胡椒入れを両断する。

叔母ちゃん、返してくれた目と耳つてこういうことなんだね。

いいよ。いいさ。受け入れてやるよ。この高い環境順応力だな。

二人は、真つ二つの胡椒入れを一瞥して、今度は凍った顔をこちらに向けた。相手が幽霊だろうが、妖怪だろうが知ったこっちゃない。

「朝っぱらから、ぐちゃぐちゃうるせんだよ。貴様ら！幽霊だろうが、妖怪だろうが、この際かまやしねえ。刻んで火曜の不燃ゴミにだしてやるうか！ええっ？それとも、コンクリ詰めにして三途の川に沈めてやるうか。どちらか選びやがれ！この野郎ども！」

そう。これが、私たちの出会いだった。

座敷に仁王立ちの私は正座の二人を目の前にしていた。どういうわけか、二人はもはや半透明ではない。

「こ、こわいねえ。お嬢さん。」

「嫁の行き手がなくなるわね。」

おいおい、てめえの立場がわかってんのか、こら。薙刀の先をドンと付いて音を立てると、二人はびくりと肩をすくめた。

「貴様！」私は、男の方に顔を向けた。「名を名乗れ。」

男の目が不自然にきよときよと動く。

「おい、目が泳いでんぞ。」どすの利いた声で促すと男は早口で言った。視線がまだ梱包されている陶器類のほうに向かう。

「ええと、オガミダイジロウ。」

「落ちてる新聞紙のテレビ番組欄から名前取るのやめて。お前の父ちゃん、子づれ狼か。しとしとぴっちゃんか。似合いの髪型にして

やろうか？ああ？」

ふるふると首をふる男の方を見て、クスクス笑っている少女に視線を移す。

「じゃあ、お前！」

少女は飛び上がった。

「えっと、お春？」

なんで、疑問符なんだ。

「自分の名前にクエスチョンマークつけんな！さては、それも偽名だろう？」

「だって、名乗りたくないわね。」

罵倒する私を恨めしそうに上目遣いで見上げて、少女は口を尖らせた。

「俺らは名をとられるとその人には手出しできんからな。」

男が説明口調で付け加えた。

ほう。私は目を細める。叔母ちゃん、なんて言ってたっけ。ダイジロウに、お春か。

化生の浅知恵もいい加減なものだ。さあ、覚悟はいいか。

「大童子。」

男がぐと喉から音をだした。

「春日。」

わ、と少女が両の手で頭を押さえる。

「この世は生きている人間様のものだ。そして、この家ではそれが私だ。よって、このうちは私のものだ。お前らここから出て行け。」

私の言葉に二体の物の怪は首をふるふると横に振った。

これは、想定内だ。

せっかくの同居人、利用しない手立てはない。もちろん、『仲良くする気だ。』

「そうか、出て行かんか。それならよかろう。私は心が寛大だから、ここに置いてやってもいい。ただし。」

恐る恐るこちらを伺う二人に私は目を細める。

「いい子にしろよ。働かざる者、喰うべからずだ。私はこわいぞ。聡子叔母のようにはいかんからな。」

一瞬二人は顔を見合わせて、次の瞬間腹を抱えて笑いだした。な、なんだ。

「お前が、あの美人で清楚な聡子の姪とは驚きだねえ。」

「似ても似つかないわね。」

うるせー、化け物。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「初心者なのに、不慣れな町なのに、なんでこんな後ろに積んでるわけ？」

不慣れな町で買い物に付き合ってくれという従兄弟がちらりとバックミラーを覗いて言った。バックミラー越しに件の二人が、後部座席にちゃっかり収まってシートベルトまでしている。

「もしかして、見えてるのか？」

青ざめている従兄弟の顔を凝視して、私は買ってもらったばかりの中古車のハンドルを握り締めた。

眼鏡をずりあげる従兄弟、君、手が震えているぞ！

「見えてるよ、最初から。つーか、聡子叔母のところに遊びに行く度、どれだけこいつらにいじめられたことが。」

そ、そうなのか？振り返ると、二人は凶悪な微笑みを浮かべて掌をひらひらさせた。

「やー。皓くん。君、背どんどん伸びるねえ。屋根つきやぶんじゃねー？」

「誰かと思えば、くそ眼鏡か。」

そのあざけりを含んだ声に皓が毛を逆立てた。まるで猫みたいだ。

「ほら見る、既に僕をからかってるじゃねーか。なんであんなの呼び覚ましたんだ。昨日は、雑魚はいたが、こんな大物はいなかったぞ。」

あの雑魚共は俺達が一掃したもんね。というふざけた合いの手が後ろから入るが、皓は完全無視だ。

「今日という今日まで、環ねーさんだけは、日下家くさかの呪われた靈力の血から解放されていると思っていたのに！」

皓、取り乱しすぎだろう。

「私も、今日という今日まで鈍感パワーで護られていると思ってたんだが。」

いつもはクールで、この前もバレンタインチョコを44個ゲットし、44人の女を泣かせた従兄弟が目をむいた。ほう、これは見ものじゃないか。

「だったら、なーんで、そんなにあつさり運命あきらめて受け入れちゃってるわけ？しかもなんで、こんな大物を飼いならしてんの？」ふふんと私は鼻を鳴らした。

今、思えば私は気を紛らわせて、救われたかったのだ。

一人で暮らすという孤独と、新しく築かなくてはいけない家族関係、母との距離をうまく取れないでいる閉塞感、そんなものから目をそらし、新しい日々をくれる何かに強く惹かれたのだ。

「聡子叔母に家ごと譲られたんだ。面白そうだと思って。」

後ろの二人はようやくエンジンをつけた私に不満そうだ。

「早くいこーぜ。お買い物。雪見大福買ってよ。おねーさん。」

「私は花柄のお茶碗がいい！」

おい、皓が小声で言った。

「本気マジで。いや、真剣これ飼う気？」

祖母の菩提寺に参ったついで、紅葉を見にここまで足をのびたつていうのに。

雨が降っていたつけ。

夏の緑葉には雨のつややかさも風情があるうが、晩秋の枯れ紅葉に

雨だなんてなんだか辛気臭い。

あの日、私は近鉄の駅近くの懐かしいアーケードを時間つぶしに歩いていた。

これから、近鉄に乗って、大阪までそこから新幹線で岡山で乗り換え。我が家までは6時間はかかる計算だった。

もう一日泊まっていけばよかったかしらね。

にぎやかだった商店街も池近くまでたどると人通りもなく寂しい。名物の茶粥を売る店があつて、その近くに小さな古物商を見つけた。赤いサル型をした護りが軒先にぶら下がっていて、ショーケースにはおどろおどろしいお雛様があつたつけ。後れ毛が不気味なお雛さまは口元が緩んで、お齒黒を履いた齒が見えたし、白粉の剥げたお内裏様は、他に例を見ないほどにサディスティックな微笑みを浮かべていた。

私は古ぼけた引き戸を薄く開いて、中をうかがった。

別にお雛さまが欲しかったわけじゃない。曳かれるって、ああいうことを言うのね。

最初から欲しかったのは多分貴方。

貴方の方でもあそこから出る術を探していたんでしょ？

とにかく、あの店で私は貴方を見つけた。

ほつれ毛のかかる白い端整な顔立ち。険しいというより苦悩を秘めたような眉、伏目がちの目は二重の切れ長。鼻筋は他にみたことがないほどに、すっきりとすこやか。嫣然と朱を履いた唇から除く齒列は整然としていた。どこか、貴方はまどろんでいるように見えた。それはうつくしい面^{おもて}だった。強い靈力をたたえた男、大童子^{おおどうじ}の面^{おもて}だとすぐに分かった。

古道具屋の女将さんは、商売人なのに、どうもそれは良くないって私が貴方を買うのを止めたつけ。

「この面は夜な夜な人を斬るんですよ」って。

日下の血が騒ぐわ、上等よ。

家にやっとたどり着いて、貴方の入っている包みを居間の炬燵の上

に置いたつけ。

家の護り神と普段言つてはばからない春日^{はるひ}は怖がつて近寄ろうともしなかった。

私を買ったばかりの古い反物が雨で湿っていないか確かめていた時、後ろに貴方の気配を感じた。

傍らに座った春日^{はるひ}が、ちらりとそちらを見ながら、私の袖を曳いて警告したのを覚えている。

振り返ると目が合つて、貴方の右手の刀が小さく鳴った。

そう、思ったとおり貴方の姿はあの面^{おもて}と同じぐらい綺麗だった。

程よく刈られた髪は無造作だったし、暗い色の火消し装束はとても似合っていた。

こちらを見据えるすつきりとした面差しは目を奪うのに十分だった。目を奪うといえば、手甲についた血のりもそうだったけど。

だけど、それよりも胸を突いたのは、貴方のその哀しげな目だった。目を離すことができない。

手を差し伸べずにはいられない。

それが、貴方だった。

弥生のこと。春日と修羅（後書き）

ササガネです。

山陰はもう寒い。隣の県ではタミフルの効かない悪玉インフルが出現しているとか。気をつけましょう。察しのよい方は、山陰地方の小さな市がどこか当たりをつけてきたんではないでしょうか。公国はシリアス傾向なので、笑いと、友情とを織り交ぜて書けたらいいなと思うのでありました。

弥生のこと。怪相（前書き）

ちよびつと、怖いかも。

夜、一人はこわい??? いや、そんな怖くはないか。

弥生のこと。怪相

(1)

三月とはいえ、まだ寒い。

そして、炬燵の中に納まっている化け物が二人、いや二体、あるいは二個。

寝そべって漫画を読んでいる二人だが、花柄の炬燵布団の中では、壮絶な陣地取り合戦が繰り広げられている。

いや、おねえさん入れないでしょうが。

「寝てばかりいると、消化に悪いよ。」

腰に手をあてて言うが、二人とも無視。漫画に夢中だ。

「だから、寝てばかりは、牛になるよ。」

無視。

牛になるぞ。つか、なれ。いや、なりやがれ。

怒りを押し殺し、優しい声で尋ねる。

「今日、買出し当番、だれかなあ？ 洗濯用洗剤、買って来てよ。」

春日が漫画をめぐりながらいう。

「大ちゃんだわね。」

「いやー、春日ちゃん。ここはダイエットをかねていつとこーか。

つか、俺、行ったよ。うん、おりゃあ、行った。」

いや、大ちゃん。

君、春日を一瞥したその目つき、ヒジョーに疑わしいから。

春日も負けてはいない。

「いつ行ったんだよ。てめー。一回、でろよ。中が足くさくなるわね。」

「ばかつ。てめえ。俺の足はくさくねえ。朝露に濡れる薔薇の香りがすらあ。あれえ。なんかにおうわけ？ 足くさいのは、おめえじゃねえ？」

「女の子になにいうか！」

「女の子って、おめえの場合、ビジュアルだけの話だろ？その実、えーといくつだっけ？今年の節分、いくつ豆を食べましたか？」

「そういう、おっさんはいくつ食べましたか！」

「えーと、おれ？二十六個？」

「うっそだあ！年、さば読んでるわね。おっさん」

「二十六では、おっさんとはいわねえんだよ。くそばあ！」

「黙れ、くそじい！」

炬燵の中の陣地取りが激しくなる。

ええと。

や、やめなさい！

「とにかく、おりゃあ、行ったから。」

「年とりすぎて、ぼけたんじゃないかねえのか？いつ行ったか、言うてみる！」

「いつって、そりゃあ、よお」

大童子が、ぴたり動きをとめた。きよときよと黒目が左に右に動く。

「あれさ。あんどき。あん時。あん時に行ったよ。おお、行った。うん、行った。確かに行った。」

おい、目泳いでんぞ。

「私は、あん時の後に行ったわね。」

思わずこける。春日、お前もそれに乗つかるのか。

「あん時の後の後に行ったのが、俺の言ったあん時だ。」

「私は、あん時の後の後の後にも行ったわね。」

こら、やめんか。そのぬるくて醜いなすり合いを。

「てめえら。洗剤、買いにいけつつてんだろうが。ごまかすんじゃないぞ、こら。」

どすの利いた声でいうと、大童子が口を尖らせる。

「そもそも、化生が買い物できるわけなくね？足がねえんだぜ、化けもんでのは。」

「そうだね。貞子のように匍匐前進してると、日が暮れるわね。」
いや、あるじゃん足。

炬燵で今、激しく戦っているそれ。いや、それだよ、それ。
それが、足でないなら、その四本の棒はなんだよつ。

だが、まあいい。既成事実を示してやるまでだ。

「こないだ、はら屋のたい焼き買って喰ったのはだれだ？」
春日と大童子の眉がぴくりと動いた。

交わされる三人の視線、無言のやり取り、ぎりぎりの駆け引き。
重い沈黙をやぶったのは、とてもお手軽な感じの機械音。

ピンポン

来客を知らせる音だ。

受信料の振込み手続きはすでに済ませてある。

越してきたばかりの、しかも学生の一人住まいとは思えない一軒家
に來客者といえ、あれだ。

寝そべっていた春日と大童子がはしつとばかりに起き上がった。

目が輝いている。

こいつらは、新聞屋、押し売り、新しい信仰への扉の皆さんが大好
物なのだ。

うつ、悪い予感。

「俺が行く！」

「私が行く！」

二人が争うように玄関先に向かう。

追いつがるも、廊下を駆け抜け抜け玄関にあと一息というところで、突
然金縛り。

いやー。やーめーてー。

私が無駄にもがいている間に、事態はどんどん進展する。

「どちらさまあ？」

春日の浮ついた声がする。

「やまかげ中央新聞です！」

「はいはい、ただいま。」

春日がつるりと顔を撫でる。あつという間に、背が伸び妙齡の娘になる。

だが、待て。

なんで町娘？つぶし島田、結ってるひとなんて、いないよ？時代がちがうだろ！時代考証しろよ！

コスプレにしか見えんだろぅが！

「今、あけます。」

春日はいそいそと扉に手をかける。

「こら、春日開けるな。大ちゃん、止める！やーめーてー。」

にやりと大童子が笑う。凶悪な微笑み。

こ、こいつ。グルだ。

願いもむなしくガラス戸がかりりと開いて、新聞屋のおじさんが顔をのぞかせた。

「こんにちは。やまかげ中央新聞です。先週、越してきたん？新聞とらん？」

「家のことは、うちの人に全部まかせつきりで、ちょっと、あんた！」

「いや、このあたりは、みんな取ってももううつるんだがねえ。」

怪しいって！明らかに怪しいって、気付いてんだろぅ！おっちゃん！鬚だし、鹿の子模様の着物だし。

「なんだあ？お春。」

あごをかきながら、大童子の登場。

「あんた、新聞だつて、どうしよう。」

「どうしようつておめえ、うううう、うおほっほん。」

突然、大童子が玄関先に手をつく。

「あ、あんた！」

「お、おはるう、すまねっえな。おれがこんなばかりに、新聞もとれねえ。なんて・・・」

「いいんだよ。あんた。あたしは気にしちやいないよ。」

あの...、もしもし？

「電気屋の広告も入るよ。ここは電気屋が3種類もあるけんね。」
今、目の前で異様なコントが繰り広げられているのにおっちゃんは
気にもとめない。

「あ、あんたあ。死んだら、駄目ね!」

「うーか。もう、死んでるだろ。」

「あと半年ね。無料だから。」

おい、人の話、話聞けよ。おっちゃん!

よろりと、春日が一步後ずさった。手について吐血しているフリを
する大童子の耳元でささやく。

「大ちゃん。あやつ、なかなかの手だね。」

「ああ。気をつける。ありゃあ、組織の人間だ。」

どこの組織だよ。

おっちゃんは、笑顔のまま続ける。

「英字新聞も出とるんだけど。どうですかいね?あと、洗剤一箱つ
けるけど、とつといて。」

洗剤?

洗剤と聞くなり、二人の体がピクリと震えた。

「まて。早まるな!」

私の叫びは届かない。

大童子が、うつむいたまま、おじちゃんの足をむんずとつかんだ。
機関銃トークを炸裂させていたおっちゃんが、初めて大童子をま
とに見た。

「あのお。新聞読みたいんですけど、手伝ってもらえませんか?」

「はい?」

「新聞、読みたいんですがね。最近よく見えなくて、おかしいな
ー」
と思つたら、目玉を置き忘れたみたいで。」

「やだなー。めがねのことだ?。」

おじさん、いい突込みです。

いやー。実は今もね。探してんですよ。といいながら、大童子がゆ
っくりと顔を上げる。

「ああっあああ」

おじさんが一歩後ずさった。

「ほらね。俺の目玉、知りませんか？ 探すの手伝ってもらえませんか？」

「何言つてんだい、あんた。」

婀娜つぽく、町娘姿の春日が言った。そつと、大童子の肩を抱き、あごに手をかけて上向かせる。目のあるべきところに深い深い、暗いくぼみが穿たれている。

「先週、たまちゃんが喰つちまったじゃないか。あんたの目玉。そんなに、探さなくても。」

ちらりと新聞屋を見上げて、

「そこに活きのいいのが、うふ。ふた一つ。あるじゃないかあ。」

おつちゃんが後ずさる。洗剤の箱が転がった。

二人同時に、。

「新聞取るから、め・だ・ま、おくれ。」

「新聞取るから、め・だ・ま、おくれ。」

いやあああああああ！

激しい悲鳴と、走り去るスクーターの音。

私は金縛りが溶ける。

ほうけたように廊下に座り込む私に、振り返った二人。

ち、ち、血のりが。鮮血が。

あらゆる穴から出てますから！

しかも、その顔でわらうんかい！

「洗剤。新聞屋さんがくれたぜ。」

「よかったね。おつかさん！」

し、しりません。

おつかさん、あんたたちをそんな子に育てた覚えはないから！！！！！！

おつかさんにもね、世間体つてもんがあるんだい。

気が、気が遠くなる・・・。

(2)

ああ暗い。夢だ。

『振り返つてはだめ。』

懐かしい声は確かにそう言った。

おばちゃん？どこにいるの？

ぎぎつと足元が鳴った。

古い羽目板。橋だ。

ああ、ここは、どこだろう。

あたりを見回すが、漆黒の闇。

何も見えないのに、何処からともなく風がふく。

橋が揺れる。私は橋を支えている蔓にしがみつく。

気がつけば私はとても小さい。

蔓で縛われた縄の手すりをつかむのもやっと。

幼児の掌はすぐさま、摺れて真っ赤になった。

長い袂が風にあおられて、蝶々の模様がもみくちゃになった。

ここは、どこ？

風が止む。

心細い。

すると、目の前にポツリと淡いぼおつとした明かり。

火の色なのに、その影はとても冷たく。燃えているにも芯がなく。

右へ左へ ふつらり、ふらり。

上へ下へ ふつらり、ふらり。

それが少しずつ、最後は急に鼻先に近づいたかと思うと橋が炎に包まれた。

おばちゃん！

思わずその場にしゃがみこむ。

『後ろを向いては、駄目。駄目！』

こわい。こわい。

体の一番深いところから絞りだすように、しわがれた声が最後は悲鳴になって。

そつと、気配を感じて目だけを動かして左を見る。

真つ暗な闇の淵から白い指先がすすと伸びる。

手の形、それは優美だけど。まるで舞妓さんの白粉を塗った手のようにうつつすらと闇にけぶるように白い。

そして、闇のなかから白眼のその真白さが際立つようなはつきりとした眼が現れ、朱をひいた唇がいびつな微笑みの形でくつきりと浮かぶ。

首の下に真つ赤に染まった襦袢。

襦袢だけを纏った日本髪の方がこちらに向かっているまや半身を乗り出し、手で招く。

「おいで」

い、いやだ！

体が強張って動かない。

左の耳が衣擦れの音を聞く。

「おいで」

はつとして、左を向くと、黒い長い髪が板の上を這っている。そこから覗くのは目じりのつつた端整な顔。

「こちらに、おいで。」

左から右から、橋の遠く向こうまで。

ずっとおいでおいでの大合唱。

毛むくじゃら、鬼火、血まみれ、黒い髪。

息が、できない。

目が、乾く。

恐怖のあまりペタリと座り込んで、少し後ろに身を引こうとしたとき。

『戻っては駄目』

おばちゃん！

その声ははつきり後ろから聞こえた。

『振り返っては駄目！』

いや、いや。

後ろにはおばちゃんがいる。

やさしくて綺麗で強い、暖かいその人が。

しゃくりあげながら、首と肩に力を居れて、ゆっくり振り返りかけたとき。

誰かが後ろから幼いからだをしっかりと抱きとめた。

暖かい。

「おばちゃん？」

しゃっくりにひっかかりながら聞く。

でも、この腕は、太い。形がくつきりとしていて、筋肉がついている。

だれ？

腕の主は私の頭に掌を乗せた。

『おばちゃんは、後ろをむいちゃいけねえって、言っただる。』

前を向いたまま頷く。

瞬きと一緒に涙の粒が落ちた。

『じゃあ、そうしなきゃあな。』

また頷く。

『さあ、行こうか。』

夢の中で私は思う。あれは、誰だっ たんだろう。

弥生のこと。怪相（後書き）

笹ヶ根です。ライトと笑いが苦手なので、練習のつもりで書き始めましたが、なんだか、アクセス数が、『その公国、青き母に抱かれ』の方より、多いのはなんだろう・・・しかも、一話しかのつてなくて、日にちもたった昨日から俄然増えている・・・何故だろう。

ところで、はら屋の鯛焼きは私の大好物です。山陰の小さな市に寄りの際は、駅のコンビニ、スーパーで探してみてください。あんこが大量に入ったのが個包装されてますから。

次回は、白沢^{しらさわ}さん登場です。

弥生のこと。阿国衆（前書き）

たくさんアクセスありがとうございます。うれしくて次話更新しました。

弥生のこと。阿国衆

その場所は、小さな町を一望できる。

手前にかかる神の名を冠した橋。お椀を伏せたようなドーム状の建物。

小さな町ながら、転々と散らばる細かい明かり。それは人の営みの象徴。

その様子を展望台の丸い屋根の上から見下ろしているのは一人の男。黒尽くめの古風な出で立ち。腰には刀。

「野郎、どこに行きやがったんでしょかね？ 気配がまったくよめねえ。」

獲物を探る鷹のように、街を見下ろす男に、少年の声。

揃いの格好の少年は松の木に立って、古めかしい形の双眼鏡を覗いている。

「さあてね。どうせ小物だ。夜陰にまぎれて息をひそめてりゃ、雑魚と区別がつきはしねえ。気配もかくせねえ程度の奴だ。殺る気分になったら、すぐに分かるだろう。手下^{てか}には、気をぬかねえよう、烽^{とぶひ}（のろしのこと）で知らせるように言っとけ。」

「承知。」

少年は、双眼鏡を降ろした。

どこからともなく甘い香りが漂って、男がそれに興をそがれたように空を見上げた。

「梅か。」

冬の日本海を奔る風に蹂躪され、冷え凍らされたこの土地にも、ようやく訪れた春の兆し。

少年は、男のそんな様子を横目で一瞥。

視線を街にもどして、わざとらしく続ける。

「ところで、さっきから妙な気配がするんですが、俺の気のせいっすかね？」

「いや。」

にやりと男は笑った。

「俺も、感じるぜ。」

藍の色を濃く深く染め上げたその中天に、細い月が一筋。

色は研ぎ澄ました刃のその淀んだ潔い、確かなましろ。

「あいつが、戻ってくるとはね。」

鷹のような目で、一点を見つめ、男は腰の柄に手をかけた。
一部の弱さもなく鍛えられた鋼が、するりと漆の地を滑る。
白い煌めきが闇に閃く。

冷たい切っ先をまっすぐに、軽く眇めたその眼の先へ。

「会いたかったよ、千秋。」

唇には残忍な微笑み。

「こいつはいいお楽しみだ。」

(1)

ああ、なんてかぐわしい！

両側から、目の前に差し出されたフライドチキンにうろたえる。

「さあ、たんとお食べ。」

「心の赴くまま、その欲望を満たせ。」

につこりと微笑む春日と大童子。

あまりのことに、言葉が胸につまって、思わず顔をそらす。

「遠慮なくていいわね。」

「日ごろのストレスは食欲で、発散させるが一番！」

いや、ストレスを生み出してるのは、何を隠そう君たちだよ。

しかし、なんてことを言い出すんだ。握った小刻みにこぶしが感情

の高まりに震えている。

涙がにじんでいるのが、自分でもわかる。

「春日・大童子。」

語りかけた視線の先には、端正な顔立ちの二人が天使の微笑み。

これは、畏だ、陰謀だ。

そう、あれだ。

ハエを狩るウツボ蔓^{かすら}。蟻をさそうあり地獄。

シーザーをやったカエサル。本能寺の明智光秀。

世界征服をたくらんで、なぜか幼稚園バスを狙うショッカーだ。
どん。食卓を両の拳でたたく。

「これは、なんの真似だ。」

「あれ？大好物じゃなかった？」

そうだ。そうだとも。

このかぐわしい香り。確かなスパイスと塩ときつときとの油のハーモニー。油に指先を光らせながら、次のピースに手を伸ばすその時、脳内を駆け巡るドーパミン。

ああ、抗いがたい至福の時間。

頭を振る。

冷静に、冷静になれ。

ピンチのときほど冷静さが必要だ。

「な・ぜ、チキンなんだ。」

「おりゃあ、たまきのために思っ…」

「ひどいわね。」

ぎろりとその顔をねめつける。鼻先に狐色の輝きを突きつけられて、気持ちぐらりと揺れた。

必死にこらえて、声を出す。

「うそだ。」

「ほ・ん・と」

「ほ・ん・と」

こ、こいつら。

思わず齒軋り。

なぜ、そんなに楽しそうなんだ。

なぜ、そんなに目じりが下がっているんだ。

なぜ、そんなに息がぴったりなんだ。

図っている証拠だろうが・・・。

「もどつてから、食べる。」

誘惑を断ち切るように食卓を立つと、二人が同時に重々しく首を横に振った。

「それは、ならぬ。」

「冷めてからいただいたのでは、『俺の屍を越えていけ』とばかりに、死んでいったミスター・チキンに失礼だ。わかってんのか？」
は、春日・・・。

確かに、こいつはミスターだろうとも。だが、冷えてもミスター・チキンはおこらないと思うよ。

「そうだ。雨の日も風の日もわが身も省みず、立っておられる白いスーツのご老人にも失礼だ。」

額に眉を寄せ、腕組みした大童子が相槌を打った。

いや、やつは寒さも風も感じませんから。

偽者ですから！もうとつくに死んだおじいちゃんですから！

二人は同時に手にしたフライドチキンを見下ろした。

「そこまで、いうなら仕方がない。我らがいただこう！」

「遠慮なく、いただきます！」

結局そうかい。

もう、我慢も限界だ。というか、何の我慢をしているんだ私は。

「おい。」

唇が油でよごれた二人がわずかに顔を上げた。

「そこに直れ。今日が健康診断の絶食日と知っての無礼だな。目にもの見せてやる。」

薙刀、とってこなくつちゃ。

うふ。

いつてきますと声をかけて、庭に回ると良い香りがした。
梅の木に薄桃色の花がちらほらついている。

「あ、梅」

見送りについて出てきた春日がすぐ後ろに立っている気配がして、
振り返る。
はっとした。

真剣なまなざしが黒い幹、ふくよかに膨らんだつぼみを見上げていた。

「春日？」

あわてたように目をしばたたかせて春日が目をこする。

「おつかしいな。ゴミがわんさか入ってるわね。木枯らしのばかやろつ。」

(2)

「おい、たまちゃん。」

健康診断を終えて構内を歩いていると、見知った顔を見つけた。皓の兄、従兄弟の武だ。

来年から、同じ大学の三回生になる。

一族のなかでは、弟の皓がクールで切れ者、この武はさわやか腹黒だと通っている。

祖母も、武は優しいのに、時々さわやかにグサツと言葉を指してくることがあるのよねと言うほどだ。

「武兄、講義は^{たけ}？」

「今日は、これから。4時からの講演だけ、聴けばいいからね。」
ふーん。そうなんだ。大学生っていいなあ。

「ところで、春日・大童子^{あれら}は元気にしてる？」

「無駄なぐらい元気。」

「皓^{こう}の話を聞く限りだと、随分たのしそうだね。いいなあ。」

皓、いったいどんな話をしたんだ。
というか、あれの一体何がたのしそうに見えたのだろう。
読めない、皓。お前の気持ち^{きもち}が分からないぞ。

「あ、ところで、たまちゃんちって、一軒家だよね。」
「そうだけど。」

じゃあ、と言って武が持っていた鞆の蓋をあけた。
それを見て私は目をむいた。

「た、武兄。なんて奴をなんてところに、入れてんの！」

「いやー。うちじゃ、こんな大きな物、バランス悪くてかえなくて
たまちゃんとこだと、あんな化け物に万年童女がいるから、ちょう
どいいかなと思って。」

白、毛むくじやら、つぶらな目、千切れんばかりに降られる尻尾。

「・・・野良犬ひろつたら、おばあちゃんに怒られて飼えなかった
って、素直に言え^いばいいと思うよ、武兄。」

どう見ても、犬だ。子犬以外の何者でもない。

「まあ、そういうことだから、かってもらえない？」

ため息。もうよくわかんないのが家に二体いるんだ。この一匹のほ
うがよほどまともで、私の心を癒してくれるかもしれない。

「いいよ。」

「よかった、名前はもう分かってるんだ。」

しゃがんで頭を撫でてやると、うれしそうに鳴いて、顔を摺り寄せ
てくる。

手を出すとお手もする。

肉球、ふにふに。

なんておりこうなんだ。

「なんて名前？」

従兄弟の声が頭上からふる。私は、今聞いた言葉を聴き違いだと思
って、顔を上げ目顔で聞き返す。

？もう一度。

「いや、だから。」

あせったような従兄弟の顔。すまないね。さっき、聴力正常だった
んだけど。

？もう一度。

はい？

「白沢さん？」

呼ばれて、犬は余計に尻尾だけが違う生き物では？と疑うほど尾を
振りまくる。

「・・・って、だれ。」

につこりわらって従兄弟が犬を指し示した。

「白沢さん。」

「と、いうわけで、犬を飼うことになりました。」

春日が歓声をあげながら、手を出す。

犬は幸せそうにその手を舐めた。

「くすぐったいわね。」

はしゃぐ春日。

「ミスター・チキン。食うかなあ？」

いや、大童子。それは私の分でしょ。

「で、名前をつけようと思う！はい！何か候補は？」

二人は、腕を組んでその小さな可愛らしいモダルマを見下ろした。

小さな瞳が期待に濡れている。

「そうさな・・・。可愛い名前がいいな、エリザベッタ・ジョセフ
イーヌ・マリー・・・。」

「そんな、甘ったるい名前は駄目ね。長生きするようないい名前が、
いいわね。じゅげむじゅげむ五号とか、」

呼びにくいわ。つか、恥ずかしくて呼べんわ。

「いやー。スリジャヤワルダナプラコッテ。」

首都かよ。

「ウマタファカタンギハンガコアウアウオタマテアトウリプカカピ
キマウンガホロヌクポカイフェヌアキタナタフ。」
山かよ。

「・・・おい、どうでもいいと思ってるだろ。」

口を尖らせて、大童子が反論。

「自分が思いつかないからって、人に責任を擦り付けるのは、感心
しないぜ。」

「・・・っ馬鹿。名前ぐらいは、考えてるよ。先にみんなの意見を
聞こうかなーと思って。」

きやつきやと春日が笑う。

「言ってみて、言ってみて。」

ええと、少し照れくさい。

「花ちゃん。とか」

二人が一瞬、真顔になった。続いて爆笑。

「し、失敬だな！」

子犬の首根っこをつまみあげて、春日が『それ』を見せる。

「たまちゃん。これ、オスだね。」

ぎゃあああああああ！

春日、女の子がなんてことを！

「じゃあ、なんて名前つけるんだよ。」

真っ赤になった顔を見られたくなくて、投げやりに言う。

二人は、再び犬を見て、それから迷わず同時に言った。

「白沢さん。」

「白沢さん。」

っ！

だから、白沢ってだれだよ。

なんだよ、白沢！

ずっと帰り道、もんもんと問い続けた疑問を口に仕掛けたとき、頭
上から声が降った。

「お楽しみのところ、失礼するよ。」

蔵の屋根の上に男がいる。その高さをものともせず、すくつとたっている。

白い淵飾りのついた黒い陣羽織、はかまを脛宛で絞っているのは大童子と似ている。

黒ずくめの衣装にぴったりの眼光鋭い精悍な顔立ち。

弥七か？お庭番か？それとも新手の変質者か？

「よう、久しぶりだなあ。でかいの。」

見上げた大童子。

「たしか・・・おめえは。」

相手が大童子の言葉を待っている。にやりと大童子がわらった。

こ、こいつ絶対、知ってるくせにくだらないこと言う。

「だれだっけ？俺の係累にこんな柄の悪い奴はいなかったと思うけどな。」

「俺の顔を見忘れたとは言わせねえ。俺とお前は、かつては志を一つにしたこともあった。しまいにや、敵同士。」

「さあて、どうだったかね？人間に興味ないみたいで、すぐに忘れるんだよねえ。」

「じゃあ、名乗ってやらあ。そのボケ耳かつぽじいてよく聞きやがれ。俺は、阿国衆・筆頭、神門忠盛だ。」

隣の春日に小声で尋ねる。

「阿国衆ってなに？」

「出雲の阿国のおっかけのことだわね。」

さらりと答える春日に、神門がつばをとばして非難の声をあげる。

「こら、万年童女！かつてに創作するな！俺たちは化生悪鬼調伏のプロ集団だ！」

「けっ。気に入らねえ男だ。」

は、春日ちゃん？

大童子がへらへら笑いながら近づき、眉間に皺を寄せて相手の顔をねめつける。

「ほう。で？その阿国衆の筆頭が、白昼堂々、銃刀法違反してまで何の用だ？」

「化生に、銃刀法もなにもねえ。おめえだつて、腰に挿してるのはなんだ？野球の道具でもあるめえ？でかいの。」

神門がにやりと笑った。いかにも、早く刀を抜きたくてしようがないといった感じ。

壊れてる。

こいつ壊れているよ。

「このあたりにヒト斬りがうろついているという報せがあつてな。どこかのヒト斬りじゃねえかと探しにきたんだ。まさか、おめえじやあるまいな。」

「おいおい、そりゃあ、とんだ濡れ衣だぜ。」
わざとらしく両手を広げて、大童子が言う。

「俺は、ここところミスター・チキンとまったりすごしてたから、ヒトなんぞ斬つてねえよ。おい、犬野郎。おまえ、鼻が鈍つたんじやねえ？もうろくしたの？善良な市民と悪鬼との区別もつかなくなつたつてわけ？」

「うつせえ。どんな面して、舞い戻つてきたのか見にきてみたら、少しもかわらねえ分厚い面の皮だ。針の心臓だな。」

大童子が、ひよいと土を蹴つて蔵の屋根に上がつて、神門の視線を正面から受ける。

「ほう。敵陣偵察のつもりか。おりゃあ、てつきり、懐かしさあまつて、俺に祟り殺されにきたのかと思つたぜ。」

にやりと唇の端をあげて大童子が言うと、神門の形のよい外上がりの眉がピクリと動いた。

「・・・綺麗さっぱり、跡形もなく被い清められてえのか、てめえは。」

「聞こえなかつたかね。てめえに清められるくれえなら、」
ふざけた顔つきでにやりと笑つ。

だめだ、大童子。完全に挑発している。

「こつちが、てめえを三途の川の川端まで案内してやるよ。」

闖入者はにやりと笑った。

「・・・上等だ。」

「あ、あの。春日ちゃん。と、とめなくていいの？」

春日は、掌をひらひらさせた。

「あれは、じゃれとるだけだがね。」

ああ、そうか。

そうだよ、知り合いみたいだったし。

がん飛ばしあつてたのが、少し離れたし。

つて、間合いじゃん。

神門と名乗ったあの男、刀抜いたよ！

あれ、真剣！真剣だよ。

「じゃれてる？はあ？どこがつ？」

「ありや、仲良く喧嘩してないトムとジェリー。若干、険悪ナルパ
ンと銭形。サルと犬だわね。」

トムとジェリーが仲良くけんかしてなかったら、普通に敵同士じゃ
ん。

サルと犬つて、相性最悪だろつ。

「何、さまよつてやがる。おとなしく、あの世に行きやがれ！」

「お断りだ！」

振り下ろされる刀を、大童子が鞘ごと抜いた刀身で受け止める。

「やり残したことがあんだよ。死んでも死にきれねえんだよ。」

神門が鋭い突きを繰り出すが、それを大童子がひらりひらりと器用
に交わす。大童子の鞘が空を切つてうなる。身を翻し、突きを受け
た神門が袈裟懸けに刀を振り下ろす。大童子がそれを鞘で受ける。
力と力のせめぎあいの中、神門の獰猛さをひそめたまなざしと、ど
こか楽しい大童子の瞳がぶつかり合う。

「抜け。どうした、刀抜かんかい。本気で、調伏すんぞ、こらー！
神門の低い声。

神門の刀を押し返し、半歩飛び退った大童子があざけりの声を上げ

る。

「へっ。お前にはこれで十分だ。みね打ちでももつたいねえや。」

「ちよろちよろ、ちよろちよろ、相変わらずすばしい野郎だぜ。」

舌打ちをした神門が刀を握りなおして、雄たけびを上げて、大童子に斬りかかつて行く。

あの、見間違ひ出なければ、普通に殺しあつてませんか？

再び、声をかけようと春日を見ると、今度は春日がうつむいて、垂れ下がった前髪の下、くつくつと笑っている。

は、は、は、春日ちゃん。

おねえさん、いままでで一番、春日ちゃんのことを、怖いわ。

前髪の下、何かふたーつ鋭く光るもんが見えるんですけど。

それ、なーに？

矢庭立ち上がった春日が、あらぬ方角から飛んできた光るものをつかむ。

開いて見せたその掌に二本の小柄こづかが握りこまれていた。

再びそれを握り締めると、信じられないような音がして、鉄製の小柄が棒切れのように砕け散った。

いやあああああ！

「あぶねえな、ふざけた真似しやがつて、餓鬼。出てこい！」

「お見事つてほめてあげた方が、いいかな。こういう場合。」

神門とお揃いの服装をしたとても冷めた目、無表情の少年が、庭に器用に着地する。

「おう、餓鬼。しばらくみねえ間に随分とでかい口、聞くようになったな。」

「しばらく見なくても、ぜんぜん変わってないね。進歩なしってことかな。」

「・・・大泣きさせて、恥かせてやろうか。クソ餓鬼。」

「意宇九郎いいうしゅうって名前があるんだよ。思い出せてあげようか？」

仁王立ちの春日に向かって、十手が飛んでくる。それを器用によけた春日が、両手を突き出すと、そこから光のたまがねじるような尾

を引いて九郎の方に飛ぶ。九郎はそれをすばやく引き寄せた十手で跳ね返す。

庭石が一つ粉碎。

ぎゃあああああ！

「何、しやがんだ！万年童女！」

「からかいに来て、飛び道具投げる奴があるかね。その品のない呼び方はやめんか。」

叫び声もでない私を無視。

二組は争いをやめない。

大童子は激しく切り結んでいるし、春日は武器マニアと熾烈な戦闘を繰り広げている。

これは、悪夢だ。

だ、だれか。なんとかして。

と、傍らでうずくまっていた子犬がすくつと立ち止まった。てけてけと、激しい争いの中に入っていく。

こ、こら、危ないんだから。ポチ。花！ジョセフィーヌ。

そうだ、名前がまだついていないんだった。

犬は、ぴたりと止まり、こんどはすうと息を吸い込んだ。

みるみるうちに子犬の体が膨らみ、巨大化する。

あ、あの皆さん。戦ってる場合じゃないよ。

子犬だったそれが、牛ほどになったとき、もはやそれは犬とは呼べなかった。

ライオンのような毛に覆われた体にあごひげが生えた精悍な美しい獣の顔。額に二本、胴に4本、角が生えている。それが、ぎろりと一同を見回した。ちなみに目は顔に三つ。体もいくつか。その目が

きよときよととうごいて同時に一同をにらんだ。

『おい！』

突然投げかけられた、信じられないほどのだみ声に、全員が動きを止める。

『おい、何やつとる。』

凍った顔つきの神門忠盛が、斬り結んでいる相手、大童子をねめつける。

「おい、でかいの。あれは、まさか。」

「ああ、あれは、うちの白沢さんだ。」

言いながら、大童子が相手の白刃を押し返して、今日はしまいとばかりに鞘ごとぬいた刀を腰にもどした。

「聖獣・白沢……。」

春日と睨み合っていた意宇九郎が、手を離してつぶやく。

白沢さんはすべての目をずっと眇めて、神門を見上げた。

『阿国衆、お前らの役目は、神さんのお膝元を平らかにすること。』

こんなところで油売ってちゃいいのかい？さつきから、ちつとばかり血生ぐせえ風が吹いてるようだが、かまわねえのか？追ってる野郎が動きだしてるかもしれねえよ。』

笛の音が当たりに響きわたる。暗くなっている東の空にしゅるしゅると煙の柱が立った。

「筆頭！烽です。」

九郎が、先ほどとは違う気迫をともなつて神門を振り返る。

「先に行きます。」

目顔で神門が頷くと、九郎の足が地面を蹴った。空高く跳躍する。

「またな、万年童女！」

「二度と来るな!!」

拳を上げて、春日が叫ぶ。その声に、九郎がちらりと笑って、闇にとけた。

「おい、お前は行かなくていいのか？」

大童子が、へらへらと笑いながら言うつと、神門は唇を引き締めた。

「てめえ、相変わらず、強いな。」

「どうも。」

たいしてありがたくもなさそうに大童子が肩をすくめた。

「領袖はお前が気に入ってる」

「俺は忙しいんでね。戻りはしねえ。」

「当たり前だ、お前を戻らせはしねえ。」

そう、鼻でせせら笑うように言った神門が大童子の腰のものに目を留めた。

「その封印、あの女がやったのか。」

問われた大童子が自分の刀を見直した。

再び顔を上げたその唇には、意味ありげな微笑み。

「そうだ。」

よく見ると、刀が鐔のところで戒めがある。

「俺は自分が本当に斬りたいものだけ斬る。」

「ぬかねえ理由はそれか。」

神門は背中を向けて笑った。

こちらに半分しか見えないその表情はどこか寂しげ。

「あの女の姿がみえねえ。」

大童子は答えない。その表情も夕闇に沈み、こちらからはうかがい知れない。

「千秋。てめえ、やっぱり護れなかったんだな。」

ぽつりと低い声が言った。

暗がりからやってきた風がほのかな春の華やぎを奪って、西の淡い空へと消えていく。

てんで違う方向を見ている二人の男。

その間に落ちる深い沈黙。

「てんめえ！大ちゃんはなあ・・・！」

春日が、いたたまれない様子で、齒軋せんばかりに何か言いかけた。私は、腕をつかんでそれを制する。

大童子が、深く心を痛めているのが分かったから。

「うせろ。はやく行きやがれ。」

神門に背を向けて、大童子がこちらに向き直った。

「行くよ。邪魔したな。」

ともかく、てめえがあいかわらずで安心したよ。

そう笑って、黒ずくめの姿が闇に溶けたその瞬間、大童子が再び、鞘ごと刀を腰から抜いた。

神門の居た辺りを、漆の鞘の身が風を切って分かつ。

肩が、大きくあえぎに揺れていた。

夕食の時間になって、離れから母屋に移動。

その廊下でぼんやりと外を見ている皓を見つけた。

「今日は、きつとカツカレーだぜ。皓。」

そう言ったのに答えず、皓は遠くの空を見ている。

「武兄。今日は西の家が騒がしいね。」

「黄帝東巡 白沢一見 避怪徐害 靡所不遍 模捫窩贅。」

くつくつと喉で笑うと、皓も少し笑った。

「白沢（おみ）さんがいるから大丈夫ってことか。聡子おばも、一体どこからあんなのをひろってきたんだろうね。」

横にならんで、同じ空を眺める。

「お前、可愛がつてたからな。少し、惜しいと思ってるんだろ。」

「まさか、うちの家には大きすぎるよ、あんなの。ぼくら二人で支えても、持ちこたえられっこないよ。それに、」

母親が帰ってきた父親に、今日はカツカレー！と宣言しているのが、

小さく聞こえた。

「聡子おば、たまちゃんが移ってきたら返すように、預けてくれたんだもん。」

「そうだな。」

西の空の焼け付くような色合いはもう、穏やかに。

東の空がもうどつぷりとやみ色に染まっている。

「すんだね。」

皓が、離れて母屋に向かう。

武は離れる瞬間、甘い香りをかいだような気がした。庭のつばみが緩んでいる。

「梅の花か……。」

目を閉じる。

あの方は、今、どうしているのだろう。

(4)

寒い。

夜、トイレに起きる。

寒い、寒い。

古い和風建築は水回りが寒い。

トイレを済ませたいという気持ちが止まりそう。

いや、何よりも息の根が止まりそうだ。

縁側のガラス戸の前を通りすぎるとき、庭に大童子が下りているのが見えた。

大童子は手を伸ばした。

何か一言二言、桃色の花をつけた木に語りかけて、そして、そっと幹に触れた。

花がひとひら、答えるようにはらりと落ちた。
それは、きれいな光景だった。

大童子は、
いま、きつと聡子おばを思っている。

おばちゃん。

花を剪定ばさみで切っていたおばが振り返った。
梅の木があるよ。どうして？梅干を作るの？

一緒にならんで木を見上げる。

あのね、昔は、女の子が生まれたら桐を植えたもんなんだけど、いまじゃ、桐のたんすってつくらないでしょ。

だから、うちはどうせならって私が生まれたときに梅の木を植えたのよ。

桜とか、薔薇の方がいいのに。

おばちゃんは、梅の花が好き。冬が終わって最初に咲く花だもの。
ふーん。これは、おばちゃんの木なの。

そうよ。

咲くの？

まだ、ちょっとしか咲かないし、ちっちゃいけどね。

梅干は？

もう、たまちやんたら、そればっか。

だって、梅干好きなんだもん。

残念、梅の実はつかないよ。

ふーん。

ねえ、たまちやん

ん？なあに？

もし、おばちゃん、居なくなっても、この梅の木が咲いたら、叔母ちゃん思い出してね。

おばちゃん、居なくなるの？

哀しそうにおばは目を伏せた。

・・・大丈夫、居なくなったりしないよ。

おばちゃんの、うそつき。

弥生のこと。阿国衆（後書き）

ササガネです。昨日、世界不思議発見で山陰の小さな市の博物館が出ていてびっくりしました。数日前に行ったばかりだったので。この話も山陰の小さな市を本拠地にしてるんですが、やっぱり見知った風景を書くのはでっち上げるのより楽です。見たままですからね。今後はじめていネタが増やして行こう。観光地なので、いらした際にも楽しめるようにね！

次話「六文銭」ゲストは越後屋さんです。大ちゃんも斬ります。（斬らせませす、というか斬れ！）決め台詞も出す予定。あ、この場を借りて。小説に投票してくださいありがとうございます。

卯月のこと。六文銭（上巻）（前書き）

今回の目玉は大童子の立ち回り。

卯月のこと。六文銭（上巻）

時は卯月。

水干を着た童子が廊下を歩いている。

両の目は凜として、少しの弱みも女々しさも感じられない。

見目よく、深い色合いの水干が映えるその姿からにじみ出るのは、強い意志と聡明さ。

長い廊下をたどりながら物思いに沈んでいた少年は、視界を掠めた白い華やぎに、つと歩みをとめ、仰向いた。

この家で初めて見る桜。

緊張で強張った唇にふと浮かぶ笑み。

強い花だと思う。

少年はきつと顎を引いて再び長い廊下を歩み始めた。

建具を開け放した部屋に何かを熱心に眺める養父の背中が見えた。

廊下できつちりと正座をし、両手を揃えて平伏する。

「父上、千尋が参りました。」

返答待つて、己の揃った指先と床の木目を凝視する。

「よう参った。入れ。」

今一度、深くお辞儀して、敷居を越える。

父と呼び始めて日も浅いその人は穏やかに微笑んでいた。

「屋敷には慣れたか？」

「日々心穏やかに過ごしております。父上様、母上様のお心遣い、もったいなくありがたく存じております。」

折り目正しく告げると、養父はかかと高らかに笑った。

「そう、硬くならんでもよい。きてもろうつたのは、他でもない。これのことじゃ。」

差し出されたものを見るや、少年の色白の頬に朱がさした。

「これ・・・父上様、何ゆえこのようなものがお手元に？」

それに答えず養父は微笑んだ。

「ようできておる。見事な大童子の面じゃ。」

それがほめ言葉と理解するのに、一瞬遅れた。

思わず、平伏。

養父は武士だが、手遊びに面を打つ。その面は稀代の物として知れ渡っている。

それを見よう見まねで打ったもの。

人に見せるなど露とも考えずに。

「ありがとうございます。」

「もともと面と言うものは僧、神官が打っておった。これは器である。人の喜び、鬼人の情念、女子の哀しみ、神の寿ぎ、舞人の心。

人に語りかけ、時には手を差し伸べる、それは神仏の像と同じほどに奥の深いもの。そなたは、神官の子ゆえ、数多の面に触れる機会があつたのであろう。また、その道理がおのずと知れているのである。この面には力がある。少年の清廉さもある。まっすぐな心根がわしにもわかる。」

「恐れ入ります。」

「わしは、良い子を養子としたものだ。千秋の家に恥じぬそなたは良い童である。当家は、文武両道の家。よき武士となるべく、これからも日々、精進励まれい。」

喜びを噛み締めながら平伏したとき、庭が騒がしくなった。

下男と何者かが言い争っているのだ。

父が眉間に皺を寄せて、刀を手に取った。何事かといぶかりながらそれに従う。

「失礼つかまつる！」

騒ぎの主がどうやら庭まで回り込んできたらしい。

「それがし、不貞のやからではござらぬ。刀鍛冶、宗由と申すもの。」

「その刀鍛冶が、いかなされた。」

養父をかばうように片膝をついて、相手を見据える。

男が少年を見て、まぶしげに目を瞬かせた。

「そこもとは、千秋殿のご養子、千尋どのにござろうか？」

思わず親子で顔を見合わせ、それから頷いた。

「いかにも。」

なんと、とつぶやいて刀鍛冶は腰を抜かしたようにその場に崩れた。それでも、顔だけはこちらを見据え、決意を秘めて言った。

「こたび、それがしは主上の枕に御立ちになられた八幡様のご託宣につき、巷を騒がす悪鬼化生、鬼女紅葉討伐のため、刀を打つ事と相成った。ついては、八幡様のご託宣につき、千秋家嫡子、千尋どのに、その相槌をお頼み申したい。」

桜の花がひらりと舞う。

卯月のことだった。

(1)

ああ、なんていいお天気なんでしょう。

久しぶりね。

空が高いわ。

雲がものすごい風であおられているわ。

西の空がくれかけているの。

からりと開いたばかりのガラス戸をまた閉じた。

「寒い。」

玄関先で二人ならんだ大童子と春日が重々しく首を振る。

「いけ、いくんだ。」

「おいしいアゴちくおでん食べたいなあ。」

言いたい放題言っつて、二人は奥の間に戻っていく。

4月。

それでも山陰の町は寒い。

土鍋をしまつ前にみんなでおでんを食べようと言っつことになったの

だ。

「ふあい。」

肩を落として玄関をあけると、見知らぬ老人が目の前に立っていて思わず一步退く。

それにあわせて、爺さんも一步踏み込んでくる。

ち、ちかい。ちかいよ、じいちゃん！

当のじいさんはにこりと笑う。

「わたくしめ、お隣に越してまいった越後屋藤衛門と申すもの。」

「越後屋さん、ですか。」

『ふっはははは、越後屋そなたもなかなかのわるじやのう』『いやいやお代官様の方こそ・・・』あの場面が、高速回転的速度で駆け巡る。

「これは、ほんのご挨拶のしるしでございます。」

差し出されたのは紫の包み。

反射的に受け取って感じる確かな重み。

・・・ってこれってまさか。

「ええっ！ええっ？」

こ、これって。

小金の饅頭ってやつじゃないのか？

「どうぞ、ご遠慮なさらず。ところで、わたしはさみしい老人の一人暮らし。このあたりのこともよくわかっておりません。お食事がてらこのあたりを案内してくだされば、それ相応のお礼を・・・」
「っていうか、ちよつとまで、それは一体・・・越後屋が言い終わらないうちに、家の中から春日の低い雄たけび。

私も、もはやこういう展開に慣れたもの。

振り返らずよける。

春日の手から放たれた閃光が越後屋の足元に着弾する。

「な、なんの真似ですか。これは！」

あわを食って越後屋が叫ぶ。

「なんだって、かまやしないわね。」

バキバキと手を鳴らしながら春日が眼光鋭く家の中から現れる。
春日ちゃん、目がね。

とても楽しそう。

「うちの可愛いたまちゃんを、鬼畜外道の裏街道に誘いこもうとする奴は、容赦しない。それだけだわね！大ちゃん！」

呼ばれてうれしそうに大童子が出てくる。

「おう、たまき。しらねえ人から物をもらっちゃいかんって教えた
だろ。タダほど高いものはねえんだぜ。」

「いや、君にそれを教わった記憶はないぞ。」

「さあて、じいさん。」

ぎらつく目で、爺さんを見据える大童子。相変わらず、人の話きいてねえよ。この人。

「よくもうちのたまきをたぶらかしてくれたな。」

「まだ、たぶらかされてない。」

自らの名誉のためにも一応訂正を入れると、大童子も言い直す。

「よくも、うちのたまきをたぶらかしかけてくれたな。」

春日とふたり顔を見合わせてにやり。

「たまちゃん！行って来て、こいつはわたしらでしめとくから。」

庭からはじけ飛び出てきた白沢^{しらいし}さんがなにを思ったか、尻尾を振
つてきやんきやん吠え立てる。

「ああ、いくよ。もう。」

しぶしぶ、家をでて、お茶の垣根を回ったところで足を止めた。
どこかで見かけた黒尽くめが佇んでいる。

鷹のような危険な目。神門だ。

物言いたげな顔に気がついたが素通り。

「つて、通り過ぎるんかい！」

みえない。

「おいっ！」

みえないようー。みないんだもーん。

「おいっ！」

崇らぬ神に祟りなし。

「その鈍感野郎！」

し、失敬な。

わざとらしく、たった今気がついたように、目を大きくする。

「あ、出雲の阿国のおっかけ。」

ぴきつと音がするように神門の額に血管の筋が浮いた。

「だれがっ。」

あんだだ。

「今日は何？ひとんち伺いやがって。お前は、うちの大ちゃんのス
トーカーか。」

「だれが、あんな奴ストーキングするかつ。」

おお、こわ。ムキになるところが、からかいがいがあって面白い。
いい楽しみをみつけたかも。

「じゃあ、早く用事言いなよ。あごちく買いに行くんだから。」

まあ、千秋がついているから、大丈夫だとは思うが。そう一人ごち
る様に言って、神前は続けた。

「お前はいろいろ惹きつけやすい体質だからな。一応注意しておく
ぜ。このあたりに、魂魄斬りが出てる。俺達は、ヒト斬りと呼んで
る。ヒト斬り、義一郎だ。もう、三人やられた。気をつけな。魂に
傷がつくぜ。」

言って、鷹のような目を神門はさらに眇めた。

買い物から戻つてくると、土間に草履がきちんと揃えておいてある。
その横にはごつい和傘。

晴れてるのに、傘ね。

結局、越後屋との騒動はおさまったらしい。

炬燵の部屋から笑い声が聞こえるので、ふすまを開けると二人の化
生と越後屋が談笑していた。

「ああ、お帰り。たまちゃん。」

「あごちく、かつてきたか？たまき。」

紅い顔のふたり。

もしかして、酔っているのか？

炬燵の上には煮えた鍋とカセットコンロと、徳利と杯。

なんだか、酔っ払いのぼしりに遣われたようで、なんというか・・・

言葉は汚いが、胸糞悪い。

「買ってきたよ。しょうがもね、」

「おおよし。ま、そこ座れ。」

いいよ。いいよ。

もう始まつちやってるなら、しょうが摺ってくるし、アゴちく切ってくるよ。

ちよつとふてくされて、立とうとすると、越後屋が杯を差し出した。

「まあ、まあ、いっぱい。」

反射的に私の眉がぴくりと動く。

「越後屋、だめだね。この時代は未成年の飲酒は、ご法度なんだよう。」

春日がろれつの回らない口調で言う。

・・・ビジュアル的には、君もいかならずだろう。

「こんなに大きいのに？」

「昔と違って、今の子は精神年齢が低いってことだがね。さあ、越後屋。」

「はい、ただいま。」

なれた手つきで、越後屋が春日の差し出した銚子に徳利を傾ける。

「さはよいのお。」

ご機嫌な春日。

「まあ、大体五年ぶりぐれえか。」

そしてやはりご機嫌な大童子。

「手前など、いただくのは百年ぶりでございます。」

「そうか、越後屋。おめえも苦労したんだな。」

「いいえ、いえ。大童子様ほどでは。」

つて、ちよつとまて。

なんかおかしくないか、この会話の流れ。

「はつきりしておこう。越後屋。」

はい？小首をかしげて罪のない顔でこちらを向く越後屋。

「答える、お前まさか。死んでる奴か？」

なんだそんなことかとばかりに越後屋の頬が緩む。

首の包帯をとって頭を持ち上げる。

ぎゃあああああああ。

き、傷口が。

「さようで。手前は、三百年ばかり前に死んでございます。」

・・・や、やはり。

「もう、死人、化生、余外の者はたくさんだ！即刻、でていけ！」

ええつ、そんな無体な！と越後屋が身を縮めると、二人の化生が私を押しとどめる。

「まあまあ、楽しくやろうじゃねえか。」

「近所づきあいは大事ね。」

近所に越してきた人々をみんな崇つて、追い出した奴がよく言う。

おかげで家は、幽霊屋敷呼ばわりされてるんだ！

はたと気がつく。

「大童子、春日。」

杯を口元に運ぶ手を止めて、二人はこちらを向いた。

「まさか、君たちなにか、越後屋から何か受け取ってないだろうな！」

二人の目が丸くなる。

「まさか、小金の菓子折りなんぞ、持っていないだろうな！」

きよときよと動く視線。わかりやすい。分かりやすすぎる。

「目が、泳いでんぞ！」

そこにすかさず越後屋が一言。

「まあ、大童子様もなかなか隅におけないお人でございますねえ。」

「いやー。春日もなかなか。」

大童子に言われて、春日が越後屋に向き直る。

「いやいや、大童子。越後屋こそ、なかなかの悪わるだのう。」

「春日さまには、手前など、とてもとても及びますまい。」

ふははつ。ふはははははははは。

目だけでこちらの様子を伺っている三人。

こ、こいつら。

笑い倒してごまかす気だ。

(2)

「私は、海産物を扱う江戸の商人であきんどございました。」

越後屋が昔を懐かしむようにぼつりと言った。

春日が酔いつぶれて眠っているし、私も随分眠くなってうつらうつらしている。

大童子はたいして顔色もかえず、手酌で杯を傾けていた。

「親からもらった時の店は小さいもんですが、それを少しずつ広げて、大きくしてしまいいは江戸一番のおおだな大店になりました。」

くいつと杯をあおった大童子が、ちらりと越後屋に視線を投げた。

「そんな大店の主人が、なんでこんなところでさまよってやがる。」
押し込み強盗に斬り殺されたんでございますよ。

事も無げに、けれど確かな感情をこめて越後屋は言った。

手前には、昔から懇意にしているお侍様がいらして、名を齊藤 義兼様とおっしゃいました。代々与力のお家柄で、手前どもとは先代が齊藤様に揉め事をおさめていただいた折よりのお付き合いでございました。奥様は美千代様とおっしゃってそれはお綺麗でしたが、お体の弱い方でございました。跡目をお継ぎになるご嫡男もおわして、名を義一郎様とおっしゃいました。ところが、些細なことから

お上の方々のご不興を買い、斉藤様のお家は改易。斉藤様はお役どころか、家屋敷すらも手放す羽目になったのでございます。

奥様のお嘆きはひどく、お体を壊しておしまいになった。そこで薬代が嵩んで、斉藤家の家計はもはや火の車。そこにつけて、義一郎様が斉藤様に反発なさる。はたで見えていて地獄のようでございますた。

斉藤さまはがんばったんでございます。誰に笑われようと一切気にせず、傘貼り、爪楊枝の内職。なんでもなさいました。

楽しみといえば、月に一度、手前と暮を打って酒を交わすことぐらい。そうご本人はおっしゃっていました。

とうとうある日、ご自分のお身柄がご家族に迷惑をかけているのはと胸を痛めておられた奥様が、ご自害なさった。

あとを追うように、斉藤様が胸の病でお亡くなりになった。

義一郎様は姿をお消しになっていましたが、次に現れたのは、弥生の終わり。手前の枕元でございました。

道を踏み外しになって、押し込み盗賊の一味になっておられたのです。

一家は皆殺しにされ、手前も、金のありかを言う前に、仲間割れのあおりを食らって斬られました。

義一郎様は、手前のことを恨んでおられるのです。まだ、奥様が生きていらっしゃったころ、義一郎様は悪い仲間と遊ぶようになり、遊ぶ金ほしさにゆすりの真似ごとをなさっておられました。

手前がそれを見かねて、斉藤様に申し上げた。すると、斉藤様はひどく激昂なさって、ひどく義一郎さまをお叱りに。

これをきっかけに、斉藤様は、義一郎様までも仕官のあてがないようでは、一族が日の目を見ることもないと、義一郎様を商人にしようとお考えになりました。

義一郎様には、手前が知られぬように奉公先をあてがいました。けれど、すぐに逃げて戻ってこられました。斉藤様は、今度は僧侶にとお考えになり、また寺を紹介しましたが、それも嫌と。

奥様のご心配はそれがもとでひどくなられたのかもしれませんが。
義一郎様の荒れようはひどくなり、手前のところにも、金の無心に
来られたこともありました。

けれど、わたしは義一郎様に恥をかかせる形で突っぱねました。

『武士は食わねど高楊枝』

そう言つて、斉藤様のことを笑つた者もありましたが、何がいけな
いんでございましょうか。

手前は誇り高く、何があつても間違ひを行わない。手前は、斉藤様
を心から尊敬もつしあげておつたんですよ。

手前のご都合主義だとは、思いますが、義一郎さまにもそれを分か
つてもらいたかった。

けれど、義一郎さまには、それがめえの稼いだ金の上に胡坐を搔
いた強欲商人の高慢とおもわれたんでしような。

押し込みに入られたときに、そうおっしゃつておりましたよ。

(3)

「おい、越後屋。」

呼ばれて、越後屋は顔を上げた。

「おめえが『斉藤様』『斉藤様』とあんまり亡者の話をするから、
『斉藤様』が呼ばれてきちまつたじゃねえか。」

言われてみると縁側に男がきつちりと正座している。出で立ちは華
美ではないが、鬢^{びん}はきちんと撫で付けられているし、折り目のつい
た着物。そして、その誠実さを表すように男は両手について越後屋
に頭をたれた。

ああ、斉藤様、どうぞ頭をお挙げくださいまし。

あわてて、越後屋が両手を振った。

「大童子さま。」

大童子が目顔に答える。

「斉藤様は、先刻より何かおっしゃられているようなのでございますが、はっきりとは聞き取れぬのです。なんとおっしゃっているのでしょうか？」

大童子が静かに杯を置く。

「愚息が大変なことをしてかしたようで、是非詫びたい。恩を仇で返すような非道の振る舞い、申し訳が立たぬ。いくら詫びたところで、取り返しがつかぬ。」

大童子の声が、斉藤の言葉をつむぐ。

「ついては、その・・・って俺か。」

大童子が立ち上がって斉藤の方のそばに歩み寄った。浪人は大童子を見上げて、何事か熱心に言い募っている。大童子の眉がぴくりと動いた。

「斉藤さん、それは、父親のあんたの仕事だろうよ。」

斉藤は静かに首を横にする。

「そうか。あんたはちびつとしか、こちら側には這い出してくることができねえってことだな。」

決意を秘めたまなざしは、相変わらずひたと大童子を見上げたまま。

「あんたの愚息をそちら側に熨斗つけて、送り返してくれだど？」

大童子は大きくため息。

漆黒の髪をさわさわと掻いた。

「しょうがねえ。だが、その依頼、タダでは物理的につけられねえぜ。」

大きくうなずいた浪人は、ふところから札入れを取り出した。

「気持ちわるい・・・」

両足を炬燵につつこんだ春日が炬燵にアゴを預けてつぶやいた。

「頭が、鳴り鐘みてえだ・・・」

同じくだらしな化生がもう一匹。

「お前ら・・・飲まない奴にとっては、異臭の塊だぞ、わかってん

のか？」

言葉を荒げると、二人は何か言いかけて今度は「うぷっ」とばかり両手で口元を覆う。

「わかった、わかった。何もいわんからまちがっても吐くな。な？ 私は、この越後屋を隣に送り届けてくるから、な？」

かつて出したことないほどのやさしい声で言うと、ややわとふたりが頷く。

それを見届けて、ひとり管を巻いている越後屋をせきたてる。

「越後屋さん、起きてくださいよ。」

二日酔いって、呑み助に落ちる天罰だと思っていたが、周りにもこんな迷惑かけやがって。

ていうか、なんで死霊の癖に重さがあるんだよ。

ぶつぶつ文句を言っていると、よろよると瞼を開いた越後屋が

「環さま、いつかこのお礼はきつと・・・」

「・・・だまらっしゃい！大判小判はごめんこうむる！」

どうにかしてたどり着いた隣家はがらんとして殺風景だった。

・・・たしかに、こいつは亡者だから生活用品なんて要らないかもな。

そんなことを考えて、こいつをこのまま転がしたままにするべきか、それともあるかないかわからないが、布団ぐらい敷いてやったほうがよいか迷う。

次の間に行くと、碁盤がぽつんと置いてあった。

ふすまを探して視線をさまよわせていたが、とたんに身がすくむ。

うなじの毛がちりちりと総毛だった。

おそろおそろ振り返ると、意識もうろうとした越後屋に今、まさに切りかかるうとする若い男。

かつと見据える眼球をはめ込んだ眦は怖いほどにさけて、唇は憎悪にゆがんでいる。

髻はばさばさで、アゴの不精ひげがだらしない。

抜き身の白刃からは、少しにこった紅い色。

私は、直感的に察する。

越後屋に向けた憎悪のまなざし。そして、昨夜の侍に似通ったおも
ざし。

ゆらりと顔がこちらを向く。

知っている。

ヒト斬り 義一郎。

卯月のこと。六文銭（上巻）（後書き）

ササガネのおでんにはしょうがが入りますってどんなあとかきだよ。アゴちくはこの地域の名産です。

取り合えず一話完結を目指しているササガネなのですが、今回は長くなったので、上下に分割！

どうか、どうか。下もよんでくださいまし。

卯月のこと。六文銭（下巻）（前書き）

下巻、ついに大ちゃんの白刃がうなります。

卯月のこと。六文銭（下巻）

（４）

碁盤が二つに割れた。

どんだけ切れるんだ、その刀！

斬鉄剣かよ！

「どけ、小娘！」

「いやだ！越後屋さんは斬らせない！」

立ちはだかつて両手を広げる。

へひひひへひつと義一郎はわらった。目が据わってる。

危ない。あつちの世界をのぞいちまった目だよ。逝っちまってるよ！

「きりやあ、しねえ。痛めつけて金のありかを聞き出すだけだ！」

「もうやめなよ！越後屋さんを斬ったところで、お母さんは戻ってきたりしない！あんただってもう死んでるんだ。それぐらい、分かっているはずじゃん。それにあんたは、知らないだろうけど、越後屋さんはあんた達がこまらないように、奉公先の口まで作ってくれたんだよ！」

「…環さん！」

いいんです、と越後屋が首を振る。

「わたしがこの人に斬られてやりやあ、この人だつて気がすむ。」

「越後屋さん！」

私が、前に出ようとする越後屋を押しとどめようとしていると、突然、義一郎がケタケタ笑い始めた。

「知ってる。知ってたさ。とつくに」

え？

「逃げ出してきたときに、口利きやのじいさんが教えてくれたさ。でもよ、そんなのおりやあ、関係ねえ。」

それこそ性根の腐ったようなぞつとするような顔で、にやりと義一郎が笑った。

「金が欲しいんだよ。おりゃあよ。こいつの隠してる金がほしい。こいつの悲鳴がききてえ。俺を商人にしようとしくさった母親や父親なんざ、関係ねえ。俺を自分と同じように、ひいひい金稼いで生きていくように仕向けようとしたこいつを痛めつけてやるのは、ちつとばかり楽しいだろうよ。ええ？」

「あんた、頭おかしいよ。」

「おりゃあ、侍だぜ。土農工商のてっぺんだ。だが、こいつはどうだ。俺より身分が下の野郎だ。侍が商人切り殺して何が悪い。俺に泥水飲ませようとした罰だ。無礼うちだあ。」

「馬鹿だよ。あんた。」

さつと男の顔に怒気が昇った。越後屋が、たしなめるように私の袖を引く。

「いまじゃ、土農工商なんて、誰もいわねえよ。時代遅れなんだよ。そんなのあんたが威張れるネタでもなんでもないじゃん。」

「なんだと？」義一郎の頬が痙攣のように引きつった。

「だから」私は持つてきた越後屋の和傘を視界の隅に捕らえる。

「図体でかいくせに、世間知らなさ過ぎるんだよ。ばーか」

奇声を上げて、義一郎が刀を振り下ろす。

すばやくそれを受ける。

これ、木でできてる奴だっけ。

ああ、600円ぐらいのいやもつといい奴で、金属でできているのがあればよかった。

ああああ、でもいい奴は軽量仕上げだからもつとやばいか。じゃあ、まあいいか。

そんなくだらないことを散々考えたのは多分、状況をあまり理解しなくなかったせい。

手の中で握り締めた傘は今にも折れそうだ。

やばい。やばいかも。

亡者の刀で人間の肉って斬れるんだろうか？

そう思った瞬間、男の体が横に吹っ飛ぶ。

「何をしとるかね！刀では肉は斬れないが、魂魄に傷がつく。たまちゃん、魂が死ぬよ。」

心に思った疑問を答えてくれたのは、庭に仁王立ちした春日。

「なんだ、貴様！」

「小娘やじいちゃんを手にかけるような、性根腐しんこんった下種野郎に答える名なんぞないわい！」

春日のあざけりを受け、突き破ったふすまから這い出した義一郎の目がさらに、狂気をはらんでいる。

雄たけびをあげて、切りかかる男に向かって、手を突き出した春日の頭上を跳び越し、男の剣をまっすぐないだ一陣の風。

「大童子！」

「昼間っから、押し込み強盗たあ、ふてえ野郎だ。」

大童子は、涼しい顔で鞘に収まった刀を腰に戻す。

「だいちゃん！」

「春日、越後屋とたまきを頼む。」

まだ戦闘態勢を崩さない春日に、大童子が微笑みかけた。左手が刀の柄にかかる。

鞘から切羽が外れて、金属が小さく鳴いた。

伯母が封印を施した刀が抜けたのだ。

するりと重い金属が木を滑って白刃がひらりと迷いのない弧を描く。久しぶりの感触を確かめるように、大童子がそれを優雅に一振り。

義一郎がまぶしさに目を眇める。

「少しは骨のある奴が出てきたな。」

「死んでる奴に骨なんてねえよ。」

へつと大童子が鼻で笑った。

「たまきはよ、商いはいやだ、坊主はいやだ。我慢や辛抱の仕方もしらねえくせに、てめえのためにあくせく働く親父を馬鹿にしゃがって。土農工商だなんて、何の努力もしねえで手に入るもんで、威

張り散らかしているあんたの性根が腐ってるっていつてんだよ。ばーか！」

「なんだと」義一郎が齒軋り。

「おまけに、やってることは、タダの強盗じゃねえか。あの世にもいけねえで、なつたのは弱いもの選びのヒト斬りたあ、大した『お侍さん』だぜ。お父上は泣いてたねえ。誇りを持ってという意味で、侍の生まれを諭したつもりがとんだ裏目だと。」

「親父に会ったのか！」

「おお、怖え。おうよ。おめえをあの世にやってきたら、説教くれてやると息巻いてたぜ。」

いつもの軽口はそのままに、その目はひとと義一郎を見つめて大童子は言った。

あれは、笑ってない目だ。

「あの、くそ親父い！」

鬼の形相の義一郎が大童子に激しい突きを仕掛けていくが、それをひらりひらりと大童子が交わす。大童子のすばしこさのせいで、義一郎はほとんどまともに手が出せない。子供と大人が戦いつているみたいだ。

声を上げて振り下ろされた義一郎の剣を、大童子が力強くはじき返した。二人の間合いが広がる。ほんの小休止。

「親父は・・・俺をいくらで売ったんだ。」

「よせやい。そんなうすぎたねえ、話。」

大童子は息すら乱していないのに、義一郎は肩を大きく揺らしている。

「親父はいつもいつもそうだ。俺のやろうとすることに邪魔をしやがる。義理だ、忠誠だ、誇りだ、情けだ。そんなもんに振り回されて、大事を成せない臆病な男だった。傘貼りなんぞ、反吐がであ。武士の面目丸つぶれだ。俺は、そんな小物になんぞ、なりたくなかった。」

「そうかい？おめえの親父は、いい奴だったぜ。」

三分間しか、話せんかったけどな。

傘貼りなんぞ、反吐がであらあ？親父がそれをしたから、おめえは食っていったのに、その口でよく言うねえ。

にやりと大童子が笑った。

「おめえの親父は、越後屋の話しを聞く限りにや。妻子友人守るためなら、どんなことでもするような男だ。おめえの言う通り、女房子供食わしていくためにや、面目やプライドなんて関係なかった。だが、人間の誇りは忘れなかった。あつたけえ血だつて流れてる奴だった。だから、おめえの親父のまわりにや、いつだつてヒトがいっぱいだつた。」

虚を疲れたように、義一郎が口を開いた。

「越後屋だつてそんな奴の息子だから、多少根性がひねくれ倒していても手を差し伸べてやろうと思つたんだ。男が惚れる男つてのは、そういう奴なんだろうねえ。越後屋が心残りであちらにいけねえつてぐらいなんだからよ。」

だが、おめえはどうだい？

「自分の手で自分を食わしていこうつて意志もねえ癖に、プライドばかりはご立派で、人間の誇りも金繰り捨ててやがる。みてみろい、親父とてめえとどっちの死に際が全うだつたよ？てめえは、たしか押し込み強盗やったあと、仲間割れで争いになつて斬られたんだつたよな？」

ぎりぎりど歯軋りをしていた義一郎がきつと顔を上げた。

「誇りだの、プライドだの。そんなこと親父も世の中の教えてはくれなかった。」

義一郎は再び、大童子の返答を待たずに斬りかかつて行く。その刃を大童子が受け止めて、鏑で競り合いになる。

「ばかじゃねえのか？おめえ。分別のついた大の大人が、そんな屁理屈をいうことは許されねえんだよ。」

大童子はもう笑つてはいない。

「息の吸い方にしても、歩き方にしろ、何から何まで親が教えてく

れるわけでもあるめえ。足りねえ分は、てめえが両の目をしつかり開いて、見て、聞いて学んでいくことだ。親の背を見て子は育つというが、その目がひねくれてちゃ、見えるもんも見えやしねえ。」大童子が一瞬口を閉じた。義一郎の握り締めた拳が怒りでわなわなと震えているのを確かめて再び口を開く。

「何から何まで親父や世の中のせいにして、てめえとちつとも向き合おうとしねえおめえが、そのいい例だろう。わかったら、迷わずあの世に行くことだな。あの世で親父が待ってるぜ。」

いやだ。

うなるように義一郎が言った。

「この世の中、みんな道連れにしてやる。血の華をさかせてやらあ。」

おもしれえ。

大童子が懷に手を差し込んだ。手には、義一郎の親から受け取ったもの。それを義一郎の足元に投げた。

いぶかるようにあげた視線に冷たく大童子が言い放つ。

「六文銭。三途の川の渡し賃だ。向こうについたら、渡しの婆がいるから渡すといい。」

はじかれたように義一郎が切り込んできた。

「これだけ、言っても分かねえんなら、しょうがねえ。ちつとは痛え目に会わせてやらあ。」

大童子が身を低くかがめた。義一郎の太刀筋をかわして、一部の迷いもなく放たれる鋭い白刃の煌き。

凍ったような表情が、しんじられないとも言つようにあたりを見回した。

横顔だけをこちらに向けた大童子の唇がかすかに動く。

天地万物の逆旅、光陰百代の過客。しこうして、浮生夢のづとし、

目を射抜くようなあわ立つ光。

大童子はまぶたを伏せて、露を払うように、刀を一振りないだ。

光が霧散する間に、何かからんと音を立てて落ちた。

おもて
面だ。

眼窩、落ち窪み、目だけは見開いて。それでも何やら物言いたげな

その表情。

やせがこ
「瘦男。」

ぼつりと傍らの春日がつぶやいた。

「生類殺生の亡者の面。」

哀れなもんだ。

面を拾いあげ、確かめるように指で撫でて、大童子がつぶやいた。

「親父にケツひっぱたいてもらって、きっちり叱ってもらえ。」

(4)

「で、なんで？」

我が家の座敷。そこにできた陽だまりに暮板が出ている。

春日は傍らで、寝転がり、丸くなって眠っている。

悪びれない表情の二人に私は声を荒げる。

一人はにやにや顔の大童子。もう一人は文句の付け所のない好々爺。

「当家の暮盤は使えなくなりましたので、ここで打たせてもらうことになりました。」

ああ、そうそう。使用料は大童子さんに払ってますから。

一部の文句もつけさせないとばかりに、二人ともが完璧な微笑み。
いや、そういうことではなく。

「どうして、成仏しないんですか？越後屋さんっ。」

くすくすと老人は笑う。

「いやゝ。隠した金を使い切るまでは、どうにも往生できなくて。」

「でも、大判小判じゃ使えないでしょ？」

大丈夫。

にやりと笑って懷に差し込んだ手に、かの有名なブランドの財布。

「そ、それは、グイト・・・っ。」

ぶ、分厚い。越後屋、この世にのさばる気、満々だな。

見上げてくるのは罪のない笑顔。

「巷では、これがやはりと聞きました。手触りは悪くないですがね、この世の藩札も鑑札も手にいれて・・・」

「？鑑札？」

差し出したのは住基カード。

越後屋藤衛門。

君は住民登録したのか？というか、できたんか？

「いや、この世はやはり金次第ですねえ。」

ふほふほと高笑い。

こんなやつ、居ていいんだろうか。

そう思いながら、視線をずらす。

主のいない座布団があつて、その傍らに徳利と杯。

ああ、そうか。

私は思わず口元を緩める。

供養なのか。私は少し越後屋を見直す。

「越後屋さん。」

はい？と小首をかしげる越後屋に私は問う。

「晩御飯、食べてく？」

深い深い闇。

夜よりも暗い色に染まつた闇の底。

たゆとう水辺にゆれる屋形船。

いびつなほどの鮮やかな色が浮いている。

つややかな黒髪は、ゆるりゆるりとやわらかな曲線を描いて、
袪うしろめに

流れている。

赤地に金の模様をちらした袿を上^{はかま}に単を重ね、紅の袴をはいて、下には潔いほどの白い小袖。

装束をみるかぎり公家の女房といったところか。

白い両手がそつと手元の面^{おもて}にふれて、女のその紅袴ほどに朱い唇が笑みの形を描いた。

くつくくつと深い闇のしじまを震わせる笑い声。

流れる水も凍るほど、冷たい響き。

女は笑いをやめて、再びその面^{おもて}をみた。

二つに分けた髪が幾筋か額に垂れるもおどろおどろしく。

かつと見開いた金泥^{きんでい}にはつよい意志。

ひそめた眉は苦痛と怒りの形。

嫉妬の言葉を口にせんとばかりにひらいた大口には哀しいばかりの牙。

二本の角に秘めたるは禍々しい異形の力。

その面は完璧に醜く、また完璧に美しかった。

金泥の瞳をひたと見つめる女。

その顔は端整で、はつとするほど黒目がち。

笑みを浮かべる口元は形よく、上品。

女は面を裏返した。

それをわずかに仰向けた顔に当てる。

しのびやかな笑い声。

闇も凍るほどの。

水辺をすすと紅く染まった葉が滑っていく。

ここに、春など来ない。

決して、来はしない。

卯月のこと。六文銭（下巻）（後書き）

ササガネです。

先日、お越しあそばされたいろんな国の神様が帰っていかれました（26日）。神去出かみさでというそうです。この日は、聞いた限りは神様が上空を行きかってありがた〜い感じかなとおものですが、この地域では物忌みをするそうです。

考えてみれば、ササガネの地元は西日本の東より南の地域なのですが、ありがたい日には半物忌みの感じがありました。たとえばお正月。少なくとも元旦は、初詣以外は外出禁止。火、刃物類は断じて使ってはならず、ツメキリも禁止されておりました。晴れ着にはしゃいでいると怖い顔をされた物です。来られた神様に怒られると遊んでいいのは翌日からって。

ありがたや、おそろしや。

今回、お話はどうでしたか？

少しずつ、大ちゃんの過去を絡めて、敵ボス襲撃とかも入れていきますね。

幕間あるいはインテルメディオ 朔月

現世は天地を満たすあらゆるものにとって、
通り過ぎる仮初の寢床みたいなもの。

月日は永遠の旅人で、

儚い一生は良くも悪くも夢のよう。

喜びを味わう術なんてあったのか、

本人にも分らないほどに。

白露城址の一端に城山市の資料館がある。

白露城の従える『城山の杜』は桜こそ賑やかだが、まだどこか寒々しく芽吹きには少し早い。

「東風より参った災いの種が、西に根付いて今その芽を吹こうとしている」

窓から身を乗り出すように西の方を眺めていた女がつぶやくように言った。

書庫から資料を運びこんできた少年がそれを聞きとがめて、怪訝そうに眉をひそめた。

「ひどいことになりましたか？」

「それはどうかしら。まだわからないわ。城山が無事ならそれでいい。宙。まだ、新しいお守りは決まっていらないのだから、お前、墨をすりなさいな」

言われて少年はおとなしく墨を擦り始めた。

そのすべるような所作は、見た目の年のころと比べてどこか不釣合

い。
「阿国衆の筆頭は、三輪から移って参った者ね」

「神門忠盛。出自はこの辺り。向こうに居て、場所替えて戻って参った次第です」

そう。

女は手元の扇子を所在投げに弄んでいる。

「十三参りのあの晩に、縁の糸を結んでやった者も、こちらに移ってきたことだし。あの童子は、また一からやり直さなくてはならなくなっただけで、きつとあきらめないことでしょう。たのもしいと」

「介入なさるか？」

少年が墨をする手を止めた。あたりには深い芳香が満ちている。

「まさか」

あでやかな衣装のすそを払って女が振り返った。まっすぐに垂れた黒髪が房飾りのように揺れる。

「城山には城山の法があるように、あちらにはあちらの法があるという物。記しなさい、宙そら。哀しい橋姫はしりめの話を」

1) 今は昔

その女は都から遠く離れた土地に生まれた。

父と母にそれまで子はなく、あらゆる神仏に祈り初めて生まれた子だった。

女は掌の上の玉のごとく大事に育てられた。

琴を習い、歌の道を習った。

香を焚き染め、鮮やかな衣を纏った。

そうして年月を重ね、年頃になると豪族に見初められた。

男の家は豊かで、豪族の妻としては豊かな暮らしが約束された。

けれど・・・否 女は言った。

神仏より授かったこの身、かような男の下で朽ちるはずがない。

玉の輿を望む少女を探し、身代わりに仕立て上げ、豪族の家に上らせ、自らは父母と都を目指した。

習い覚えた琴は生計たつきの足しになり、また都人の目に留まる機会を与

えた。

女は貴人の腰元となり、側女となった。

まばゆいばかりの丹。

美しく、また教養に恵まれた人々。

芳しい香り。

耳心地のよい音曲に、その身を賛美する人々の声。

寵が過ぎれば、足元を掬おうとする者が現れるのが世の常。

それこそが、人の、女の業。

都に噂あり。

貴人何某の正妻が病の床に就き、あらゆる薬師くすしを用いても平癒せぬはあやし。

陰陽、僧を用いて探れば、災禍の源、側女にあり。

側女の名、紅葉くれはと申す。

正妻の座を狙わんとして呪いするなり。

女の心はどこか冷めていて、その身の申し開きさえしなかった。

この身が高みにあるときは、こそつて麗句を口にしたものたち。

彼らが今口にするのは、嘲りと乾いた笑い。

この場所は、色と香りに溢れ美しい。

けれど、ほら。

御簾の影、几帳の向こう側で交わされるのは嫉妬、羨望。畏と策略。

その卑しさや淫猥ささえも、ここでは甘い。

咲き誇り、熟れすぎた色をたたえて、腐り落ちるしかない、まるで

婀娜花あだはなのように。

未練などなかった。

女は、都を追われた。

身重の体で流れ着いた場所は、水清く、木々の麗しい土地だった。

人の心根は穏やかで、女と父母を下にも置かぬほど大切にした。

子も生まれた。

故郷の豪族から、逃れてきた少女も呼び寄せ、はじめた暮らしは予想外に穏やかだった。

作付けの相談を持ちかけられれば、都より持参した書物を開いて、知恵を授けてやった。

野党が出たと言え、都の警護について見聞きしたことを教えてやった。

琴を教え、歌を詠む。里の者は女の雅な姿をそつと見守る。

けれど、その暮らしも長くは続かなかった。

都より、討つ手が来たのだ。

『徒党を組んで都を攻めようとしてる』

富む里を妬んだ豪族たちの策略だった。

・・・女一人に、よつてたかつて醜いこと。

女はあわてなかった。

武人をもてなし、敵意のないことを知らせ、子が生まれた旨を文にしたためて都に返した。

美しい紅が里を染め上げたその季節に、再び武人は姿を現した。

白刃と悲鳴を聞いて、女は知った。

あの正妻は都から、わが身と子を追い出しただけでは足りなかったのだと。

2) 羽化

乾いて、掠れた音。

ぱさり、ぱさりと。

ほら、また。

我に返つて、両の瞼を硬く閉じていたことに気付いた。

ゆっくりと開いた眼が映したのは、濁りのない青。

秋の空は何処までも澄んで、遠く、高い。

そこに燃えるような紅葉が瞳を捕らえる。

色目のなんとはつきりとしたことか。

少しずつ厭わしくなる荒い呼吸の音が鼓膜を震わせる。

肘に力を入れて身を起こそうとするが、胸に何か重い物が載ってい

る。

はたと思いあたってかきむしりたいほどの痛みが胸を貫いた。
無事でないことは分かっていた。

抱き起こしたわが子はゆらりと不自然な体制のまま、鮮やかな紅い
落ち葉に埋もれるように倒れこんだ。

・・・冷たい。重く、鈍い柔らかさ。

一時にあの地獄絵図のような光景がよみがえって、女はうつろに辺
りを見回した。

ぱさり。ぱさり。

あとから、あとから色づいた葉が天より落ちてくる。まるで、血の
ような紅い葉

その落下する音が、確かな静寂を刻む。

すべてが終わった。この身に許されたと信じていた喜びも希望も死
に絶え、ここにはもはや骸のようなこの身以外に何も無い。

鬼女。そう呼ばわれた。

鬼女。呼ばわれて、泣き叫んだ。

違う。私は人だ。

泣いて、笑って、怒り、楽しむ。短い命の火を燃やしながら、それ
にすがって生きるなら他と変わらぬ人だ。

私が何をしたというのだ。

謂れのない咎とがも甘んじてうけた。

人の道をすることも、この身を恥じることは何一つ、犯しては来
なかった。

神仏に望んで、生まれた子だと？

ならばなぜ、かような生き筋を辿らねばならぬのか。

踏みにじられ、虐げられ、この生き筋の何に感謝をささげればいい
のか？

ぱさり。ぱさり。掌はわが子の血で真っ赤に濡れていた。

すぐそばに、最後までそばにいた友の赤黒い頬が見えた。

そこから半歩も行かぬところに半ば落ち葉に埋もれているのは、見

慣れた下女の着物の色。

ぱさり。ぱさり。

紅い、紅い色。

怒り・・・悲しみ。

否 そんな言葉など・・・言葉になどできはしない。

強いて言えば・・・そう、鬼。

くらくて、陰鬱で、まがまがしくて、闇と血と吐き氣と痛みと嘆きと、呻きと、憎しみと、どろどろとした私自身がとぐるを巻いて・

・そうだ。

思わずあげた声は、紛れもなく笑い声だった。

鬼だ。それが私の深いところを満たす。

鬼女。そう呼ばわれた。哀しかった？

鬼女。いいえ・・・ほら、もう馴染んできた。

鬼女。そうよ。掌の朱をそつと胸に押し当てた。

思い知るがいい。

その身に刻むといい。

蛹さなぎが割れて皮を落として、毒蛾が生まれ出でるように。

蜘蛛の子が親の遺骸を食い破ってその姿を現すように。

お前たちが示したのだ。わたしの進むべき道を。

お前たちが与えたのだ。わたしの新しい姿を。

さあ、味わうがいい。

私から、『人』を奪ったその罰を。お前たちの行いを。

子々孫々・・・末代まで。

いいや。激しくその考えを否定した。

足りぬ。その友、隣人、知人、敵。縁と縁を結ぶその細い糸をたどり、小さな虫が根を伝って大木をその根から腐らせ、食らい尽くすように。糸から糸、根から根。そう、根絶やしに。

女は立ち上がった。袴の裾が乱れたが、そんなことはもはや気にもならぬ。

額が裂けて角が生え、目が光、口から牙がのぞこうとも本望だ。

そうなればきつと千里を駆けて、思いを遂げにいくだろう。

取り出した鮮やかな錦の袋。

そこから滑り落ちた冷たい表面には、禍々しいほどに整った女の顔。懐剣の切っ先をびたりと身に添わせる。

蛹さなぎが羽化する時だ。

紅は血の色、炎の色。紅葉の色。

逃しはしない。

くつくつと女が笑った。

本物の鬼女になってやる。

最後の一葉まで、きつとむさばり食らうてやる。

これが・・・始まりだ。

幕間あるいはインテルメディオ 朔月（後書き）

ササガネです。何はともあれ、ネットの投票で票を入れてくださった貴方！（そう、スクロールの指が止まった貴方です！）厚く厚く御礼申し上げます。

しばらく多忙につき、更新が難しい状況だった（今も状況は続いているんですが）のですが、ネットの投票をして頂いているのを見ると俄然、書こうという気が湧いてきます。本当にありがとうございます。

では、本題に。

この章は初め次の話の頭についていたんですが、急遽切り離して、間に入れることにしました。鬼女誕生の章です。少し雰囲気変えて見ました。次回は通常営業です。

ササガネはお話を夜に書きます。（昼間は、昼の顔がありますんで）今も丑三つ時です。昨日次話を書きながら、だんだん怖くなってしまつて。基本、幽霊ネタなんで。自分で書いて自分で怯えてたら世話ないですね。

けれど、よんでくださってる方々の中に物書きさんが居たら、分かってくれると思うんです！

次話はわらべ歌遊びを交えて書いています。

しかし、何であんなにあの歌（まだ、秘密）は怖いんでしょうかね。しかも、ササガネは一番すきな遊びでした。生きている何かを煮て食って、化けて出られている歌ではないですか。（お分かりになりますか？）

怖くなってきたので、撤収です。

次話でお会いしましょう！

皐月のこと。 隔世（上巻）（前書き）

お久しぶりです。いろいろ、実生活で忙しくここにたどり着けませんでした。遅ればせながら今年もよろしく願いします！

皐月のこと。隔世（上巻）

童は額の汗をぬぐった。

長い長い石段を登りきると、噂どおりに黒々と古い宮があった。

闇参り・・・叶え事を一心不乱に思い続け、山に登れば願いを聞き届ける宮にたどり着ける。

それが言い伝えであつた。

下界からは少しも見えなかつたが、宮の頑丈な門には折から吹く風に微塵も揺らがぬ異形の灯火がともっている。

「・・・っ」

宮の前の上と下を分かつ二本の柱をくぐろつとすると、突然体が強張った。

頭を無理やり押さえつけられるような威圧感について膝を折る。

「そこな童^{わらわ}」

声を辿つて視線を上げるといつの間にか、胸に宝珠^{たま}を下げた少女が傍らに立ち、強いまなざしで千尋を見下ろしていた。

優雅な童装束ではあるが、ぞつとするような冷たい目をしている。

「ここは明山主^{めいざんぬし}が宮じゃ。行きはよいよい帰りは怖い・・・知らぬかえ」

少女が指で二つの柱の先を指し示す。

初めこの威圧感^{あかあか}は少女から発せられるものばかり思っていた。

けれど、いまは分かる。

明明とした異形の光に照らされた白い玉砂利のその先。

閉ざされた扉のその向こうから。静かに漂ってくるその気配。額づいたその額がいよいよ地に触れようとする。

「あれより先は人の住処ではない、どうだ。怖い、恐ろしいか。声でもまい」

嗤うような声に、思わず齒軋り。

・・・怖いものか。

・・・恐ろしいことなど、あるものか。

苦悶の表情を浮かべた養父母の顔が脳裏を焼く。
怖いことなど、あるものか。

ありなど、しない。

心の奥底から、頭を擡げる朱よりも黒よりもくつきりと鮮やかな感情。

胸の奥底で暗い色を放って燃える冷たく消えることのない炎。

ジリと砂利が音を立てたのは、両の手に力を入れたから。

決して・・・許せるものか。

この魂に変えても。

圧に抗いじわじわと頭を上げる。

頑強に逆らった顎から冷や汗がしたたり落ちた。

少女が含み笑ったその時。

砂利を踏む音がした。

「闇参りとは、珍しい」

たおやかな芳香が鼻腔をかすめ、しっとりつややかな風が耳朵を掠める。

「あぶく、意地悪はおやめなさいな」

涼やかな声に思わず顔を上げて、体が軽くなったことに気がつく。

鮮やかな唐衣が目を射た。

この世のものとも思えぬ端正な面立ちが穏やかに向けられている。

「明山主」

傍らの少女がつぶやいて、跪ずく。

「許しなさい。この娘はまだ生まれて間もない。だから獣の性が残っていて、少し意地悪なの・・・さて」

その人が美しい声で、名を呼んだ。

ここに来てより一度も名乗ったことがないのに、呼ばれて思わず目を見張る。

「貴方の望みは・・・そうね・・・その刀を振るうにふさわしい打つ手を知らせよと、そういうことね」

はつとして、思わず続きをまつ。

「貴方と鍛冶宗由の打った刀は確かに稀有だけれど、人ならざる者を討つには、到底及ばない。刀を扱い御覧なさいな。それが、本当にただの鈍らか、それとも何かが足らぬだけなのか、それとも討手が粗忽者であるためのなのか。お見せなさいな」

いま一度、畏怖をこめて平伏し、持参した刀をそつと抜き放つ。

白刃が燃える灯火の明かりを捕らえて、赤い光を放った。

山の主はその光を細めた目で受け止めると、顔をそらして明山の深い森を見遣った。

・・・そうねと小さなつぶやき。

やがて唇に滴るような微笑が浮かぶ。

子供のように邪気がなく、またとても残酷な微笑み。

女神と呼ばれる存在の、内に秘めたる聖と魔性のそれぞれに確かなありようを顕にする。

「近頃、わたくしの山でわたくしの許しもなくわたくしに従う八百の物の怪を駆つて、遊ぼうとするこつるさい獣がいるの」

「獣？」

「尾は九つ、姿は狐。毛並みはすばらしい白金・・・あれが欲しい。手元におきたいわ」

「・・・それは・・・九尾」

「それを狩ってきて頂戴。我が元に下らせて」

「・・・下らせるとは・・・そのようなこと、人たるわが身に」「方法は、おのずと知れる・・・それができずして、紅葉を打つことなどできるものか。打つ手は端からお前より他にはない。分かったなら、おさがり。行つて、獣を狩つておいで」

明山主は背中を向けた。

つややかな黒髪が衣の上でゆれた。

灯火が消え、あたりに闇が落ちる。

深い深い明山の闇。

九尾の狐・・・神を相手にするようなものではないか。

けれど、決めたのだ。

この命を賭しても必ず成し得ようと。

童は刀の柄を握り締めた。

私は・・・決して、退かぬ。

そして、決して死なぬ。

この志、遂げるまでは。

1)

雨が降っている。

きれいな水が降っている。

ととさまったら、そんなずぶぬれになつて。

五つになつたばかりの豊虫とよむしが、あまり意味もわからないまま、ただ父親を見上げてはしゃいでいる。

さあ、これで助かったぞ！豊作むしじゃ。

そう言つて笑っているのは、邑むらの長さま。

落ちてくる雨粒が顔をたたいてうるさいのもそのままに、それでも臉をひくつかせながら、口をあけばなし。天のその恵みの生まれ来る先に目を凝らしているのは、仲のよかった幼馴染。

その唇が言葉をつぶやいた。

なんて言ってる？

コノアメハアノコダ

鼻をつままれても分からないような暗がりで見返った。

最後のその瞬間にだらしなく開かないように、さらし紐で縛つて整えた足がこわばつて、しびれている。

目を開いて飛び込んできたのは、鮮やかな布きれの色。

ここにいることにならなければ、少女が触れることもないまま一生

を終わるはずの高価な着物。

ここにいることにならなければ、野良仕事で疲れたとと様の肩を揉み、豊虫を寝かしつけて、そうして……

輿に乗せられてここまで来たときには、酒とおなかいっぱいの食べ物で、ほかほかしていたのに、今はこの体がひどく薄っぺらになってしまったよう。

しんと静まりかえった闇の中。

昼なのか、夜なのか。もはや分からない。

気が変になりそう。

息がしづらい。

息が足らない。

手で口元を覆う。

本当は、胸をかきむしりたい。

あたしは……

霞逝く意識の中で、必死に手を合わせた。
とと様の笑顔、豊虫の穏やかな寝顔。
小高い丘から見下ろした青田の広がり。

いつもあたしたちをお守りくださる神様、仏様。

どうか、どうか。

この身と命で、村を購ってください。

ひもじいのも、痛いのも、苦しいのもいやなんです。
人が死ぬのは、いや。人が争うのも、いや。

おなかをすかせた弟は、今日もうちで泣いている。

食べる物どころか、水さえもないというのに、役人が税を出せとやってくる。

怒鳴り声と鞭の音が戸口に迫ってくる。

やっと役人が帰って、日が落ちて、夜が来る。

夜が来るのが怖い。

静かになったときに、いろいろ考えなくてはいけないのが怖い。

おなかをすかせて、目を閉じても眠ることさえできない。

明日がやってくるのが怖い。

朝になるのが怖い。

ずっとこんな朝が永遠に続くのだと、気づくのが怖い。

あたしたちはどこにもいけないのに。

逃げることもできないのに。

神様。

遠いところにいらして、あたしたちが乾いた土くれにまみれてもがいているのをみていらっやって、少しでも哀れんでくださるのなら。

助けてください。

一粒の雨、一粒の米のために祈っているんじゃないありません。

明日も、一月も、一年も、十年も、百年も・・・いいえ、千年でも・

・・・ここで守りたい。

どうか、あたしを村を守る者に生まれかえらせてください。

それが、自分で望んだあたしの望みなのです。

2)

黒い物体の表面に緑の苔がまだらについている。

鼻腔を掠めるとどこか物悲しい薫り。

極め付けが、カラスの鳴き声。

目の前に広がるのは、一面の・・・いや、見間違いに違いない。

落ち着け、私。

右手を見れば、開けた視界いっぱい美しい景色が見える。

空は青。

山は緑。

少し下がったところに、こじんまりとした可愛らしいバス停が見える。

そして・・・眼前の・・・墓場。

助手席のナビが大きくため息。

「たまちゃん。だめじゃないか」

「はあ？」

「だめだよ。引き寄せたり、引き寄せられたりなんかして」

「なに言ってるんだ。だいたい、武兄！^{たける}あんたの言うとおりに来たらこうなっただよ！」

「実は・・・こういうの苦手なんだ」

今更の告白・・・いや、爆弾発言。

もう分かってたけど。なんだか、道幅狭くなってきたところには半ば気づきかけてただけど。

・・・とつくに手おくれだつて。

「苦手なら、あんたが運転して、私がナビすればよかったんじゃないか！」

「仕方ないだろう？それに、石上くんは僕の友達だよ。この旅行だつて、彼が僕にどうぞって言っただから、実現したんだよ」

「いや、私も佐代ちゃんからお誘いもらったから」

今ゴールデンウィークの真っ只中。

それぞれ、同じ学年の石上兄と妹からゴールデンウィークでもって閉館するという彼らの実家・・・石上旅館に招かれたのだ。

「・・・こんなことなら、皓^{こう}を連れてくるんだつた」

「愚弟はな、最近付き合い悪いんだよ。本当だったら週末のたびに家に帰るはずなのに。何かと言いついて寮に住み着いてる」

武の弟の皓は今年から、県内の白露高校に進学している。

家族とは週末ごとに戻る約束だったのに、所属している地域研究会の活動が忙しいとか、図書委員の蔵書整理がどうか、いろいろ言い訳して戻ってこない。

「いい友達でもできたんじゃない？兄ちゃん離れするときだったんだよ」

「・・・そうだな。それに・・・」

顔を背けた武兄^{たける}が、横顔でポツリとつぶやくように言った。

「あそこは城山だしな」

従兄弟の少しとがった顎の形に、斜めになった太陽の光が当たってるのに気がついた。

我に返る。

早くしないとたどり着く前に日が暮れるじゃないか。

こんな薄気味わるいところで。

携帯は圏外だし。

日本にこんな未開の地がまだ残っていたとは。

サイドミラーでその狭さを確認。

とりあえずバックだ。

Uターンは無理。

ガードレールなしのがけ沿いの道を、車一台やつの道を、バックで・・・戻る。

ええ、そうとも・・・若葉マークをつけて。

「どう考えても、あんたが運転すればよかったんだ」

へらへらと罪のない笑顔で従兄弟が言う。

「無理無理。おいしい大人のジュース飲んじやたんだし」

「だ・・・から、あの時飲むなといったんだ。だからナビのねじもどつかで落つことしてくるんだ」

「ナビはね、山間部、住宅地、天候の具合では交信が途絶えて、誤差が生じることがあるんだ」

「へえ、あんたGPSついてんの？・・・ここどこが、住宅地だ。天候は晴れだろう。山といってもここは丘のてっぺんで、さえぎる

物は何もない」

「見えないシールドが、さ」

「へえ、あんた何かと交信してんだ。衛星か？神様か？宇宙人か？
・ああ・・・そうか、異次元だな。お前の故郷は第三惑星か？早くバルタン星人にでも迎えに来てもらえ」

「たまちゃん、僕がいなくなったら、寂しいでしょ。それに第一、僕、この車唯一のナビだよ。高性能機器だよ。僕いなくなると困るよう」

「・・・一体、誰のせいでこうなったんだ。

「キャトルミューティレーションだ・・・おまえ、世界平和・・・恒久的宇宙平和のために、キャトルミューティレーションされてしまえ」

と、後部座席から衝撃。

「っ？」

言い争いをやめて後部座席を振り返ると、そこでは二人の化生がつかみ合っている。

「誰だ？勝手に他人のおやつに手をつけようとしてんのは！」

可愛い華やかな着物を纏った春日が、眉をいっぱいに引き上げて叫んでいる。

「こりゃあ、親切さ。・・・駄目だよ！春日^{はるひ}おやつは300円までって決めただろ！」

白々しい大童子の微笑み。

「おやつは300円分だわね！」

「じゃあ・・・なんですか？これは。なんですか？春日ちゃん」

「・・・お・・・お前ら・・・」

「こっちは、夜食。こっちは別腹だわね」

「先生え、そんな子は連れて行けません。ここでおやつを残しておきなさい」

大童子が春日を押しやろうとすると、春日が負けじとその手にしがみつく。

「いやあだ、前歯でくらいついて、離れないわね」

カプリと鮮やかに大口を開けて大童子に食らいつけば、とうの大童子が悲鳴を上げる。

「いたたたたつ。お前、どんな騷されたの？母ちゃんの顔みてみたいわ・・・食うな食うな、お前共食い系妖怪だったのかよ」

・・・いや・・・多くは望むまい。

「私の母は荒れ狂う日本海、父は実り豊かな北山山系だわね！だれが、共食い系だ・・・お前のようなだめ野郎が、私と同種と思うなよ」

「じゃあ、海にでも山にでも帰りなさいっ！とーちゃんとかーちゃんがか心配してんぞ！」

・・・楽しい旅？・・・だし。

「あつ！UFO・・・！」

右指を虚空に向けた春日の動きに、つられて大童子が視線をさまよわせる。注意をそらした春日の左手が容赦なく菓子袋を奪い去る。

「この、卑怯者っ。嘘つきは泥棒の始まりってんだっ、しらねえのか？」

「小童^{こどう}。こんな子供だましによく引つかかっておいでだね」

・・・収集がつかないよ。

「おーまーえら、この状況わかってんのかっ。携帯も通じない、頼みのナビもいかれている。そして深い山奥に置き去りなんだよっ。

村人一号も二号も三号も見えないんだよっ！」

すつと息を吸って続ける。化生二人の肩越しに小さなバス停の青いベンチがちらりと見えた。

「静かにし・・・っ」

二人の化生と、武兄が、急に言葉を止めた私の顔を見た。だつて・・・。

私は見たものが幻ではないかと思って何度も何度も瞬きをした。指をそろそろと持ち上げて、先ほどまで確かに無人だったバス停を指した。

三人同時に頭を動かして振り返る。

その青いベンチには、今4、5歳ほどの子供が呆然とした様子で腰掛けている。

「子供が・・・急に・・・椅子から」

そう・・・ぽわんと。

「椅子から？」

こちらを振り返った武兄がすっと目を眇めて、聞き返した。

私はごくりとのを鳴らす。

のどが・・・カラカラだ。

「椅子から沸いて出た」

3)

たどり着いた石上旅館は先祖代々三百年、直し直し受け継いできたという噂のとりの貫禄。

平屋の木造建築は黒光りする瓦が緻密に積まれていて、古めかしいことこの上ない。

しかし、まず先決は例の子供だ。

おかしな登場の仕方をしたのはさておき、どうやら妖怪、化生の類ではないし、生身の人間の子供だ。

まず電話を借りて警察に迷子の届出をした方がいい。

家族が心配しているかもしれない。

これが、武兄と私の見解。

後部座席の春日と大童子に挟まれて、子供は自失したように遠くの一点を見つめたままだ。

着衣は汚れていないし、見たところとくに目立った外傷もない。

「おい・・・餓鬼。どこから来たんだ」

大童子がペシペシと頭をたたく。

この化生は、ぶっきらぼうを装いながら、この新しい客人が珍しく

てちょっかいを出したくてたまらないらしいのだ。

「こら、汚い手で触るな」

私の声に大童子が不満そうに手を引っ込めると子供の目が不安げに動いた。

手を伸ばして大童子の暗い衣のすそをつかむ。

指が白くなるほど。

「おつ。見ろ、たまき。子供は正直じゃねえか。誰が一番心きよらかか、ちゃあんと分かってるんだ。子供は神様の物だとよく言ったもんだね」

大喜びしている大童子の横で、春日が不機嫌そうに沈黙している。いかん、これはまたけんかの種だ。

「くだらないこと言ってるで、その子をおろしてやって」

素直に大童子が従うと、先ほどまで死んだように穏やかだった旅館の中から人々が転がるように飛び出てきた。

「祐ちゃん！」

母親と思しき人が子供の身体をしつかり抱く。

「どうして、いなくなったりしたんっ？」

ゆずぶられても子供はどこか上の空で、くたりくたりと頭が重そうにゆれた。

「どうもご親切に」

安堵の表情の年配の男が近づいてきて、私たちに頭を下げた。

「あの、僕、今日たずねることになってた日下です。さっき迷って上の方の墓地に言ってしまったて、そのバス停でこのお子さんを見つけたんです。どうも家の人がいなみたいだし、様子がおかしかったので、旅館で電話を借りて警察に連絡しようとしてきたんです。ここの家の子だったんですね」

武兄が手短に説明していると、庭の方からタイミングよく石上隆弘・佐代兄妹が姿を現した。

「わあ、よかった」

「祐ちゃん、日下一族が見つけてくれたの？」

一族・・・固有名詞にそういうのをつけると変な武装集団みたいじゃないか。

幾分落ち着いた様子の母親がこちらに初めて目を向けた。

「あの・・・申し遅れまして・・・息子の祐太をつれてきて頂いて、本当にありがとうございます。佐代と隆弘の姉の幸代です」

「父の隆夫です」

年配の男が言ったので、にこやかに武兄が会釈した。

「改めまして、僕が日下武、こっちが環です」

武兄が私の後頭部に手を掛け、無理やりお辞儀させる。

そんなことしなくても、礼儀ぐらいは心得ている。

反論の言葉を世間体という大きな壁を前に飲み下し、引きつる頬を押さえにこやかに微笑む。

「こんにちわ。お世話になります」

「で・・・」

全員の視線が幸代に釣られて大童子達の方に向く。

・・・え？

「こちらのお二方は？」

ぎよっとして武兄と顔を見合わせる。

今日はこいつら『見える』バージョンなのか、そんなこと打ち合わせしていなかったぞ。

武兄が眉をひそめて、小さく首を振る。

無理だ、どうごまかせと言うんだ。

私は片眉を上げる。

さて、どうする。

われわれの関係性を・・・。

武兄と無言の問答を繰り返していると、ついぞ聴いたことのないさわやかな声が鼓膜に飛び込んできた。

「あ、どうも。実は僕、石上旅館に一度きたことがあって、今年閉館するって聞いて、懐かしさのあまり無理についてきてしまったんです。僕、日下一族の友達で尾上大三郎といいます。こっちは妹の・

・・・」

えっと、だれだろうこのさわやかこの上ない男は。

「陽菜はるなです。よろしくお願いします」

可愛い声。

あれ、春日、出雲弁はどこに行った？

そう思ったとき。

「ひいおじいちゃんが・・・連れ戻してくれた」

はつきりと幼い声があった。

「祐たん、どうしたの？・・・おじいちゃんって。おじいちゃんは祐たんが赤ちゃんときに亡くなったよ。覚えてるわけじゃない」
佐代が屈んで問うと、祐太がようやく焦点を結んだ視線を皆に向けた。

「ひいおじいちゃんがこつち側に連れ戻してくれたの」

その場にいる者がみな、子供の語る異様な話に耳をすませている。

「おじいちゃんはどこに？」

私の問いに祐太は首を横に振った。

「女の子に連れて行かれちゃった。あとはわかんない・・・でも」

「でも？」

「ひいおじいちゃんは、逃げろって」

子供は澄んだ瞳で皆をしっかりと見た。

子供は確かに神の側のものだ。

私は静かに身体の毛が逆立っていくような感覚を感じる。

なんだろう。怖い。

とても怖い。

この話は、よくない。

「早く、ここから、少しでも早く逃げろ」

子供は後に何度も思い出すことになるその言葉で、はつきりと警告した。

「ヤマメが降りてくる」

3)

初めての春を覚えている。

あたしは、村を眺められる場所から、水の張られた田んぼを見ていた。

田んぼは空の色を移し、きらきらと輝いていたっけ。

本当は、昔そうしていたようにあぜの間を歩き回り温かくゆるんだやわらかい水に触れたかったけれど、この変わってしまった体では到底里におりることはできない心持だった。

そつと笹の小道を下り、開けた場所から様子を伺うと、以前より遠くを見渡せる目を得た私には、村の者達が田植えの準備をしているのが手に取るように分かった。

豊虫も着物をからげておお張り切りだ。

ふと豊虫が顔を上げてあたりをきよろきよと見回した。

・・・あねちやま

その幼い声に胸をつかれる。

そくだよ。あねちやまはここにいるよ。

ここでずっと豊虫のことを見守っているよ。豊虫の子や孫が飢えないうちに、楽しく暮らせるように。

豊虫の傍らに、見覚えのある女が立ってその頭をなでている。

あ、あれはお隣の後家さん。

女手のいなくなつたうちの後妻に來たのだとすぐに知れる。

ああ、もう下界^{した}にはあたしの居場所などないのだ。

そう、この姿かたちはもはやあたしだということすら分かりはしないだろう。

でも、いいのだ。

あたしはこうして雨を降らせ、夏にいつくしんでは育み、秋には実らせ、冬には癒すのだ。

そうして村を守るのだ。

下界のみんながあたしに手を合わせている。

みやさん、どうか今年の実りがよくなりますように。

分かってるよ。

分かってる。

でも、もうだれもあたしの本当の名前を呼んではくれない。

ぽっかり開いた穴から染み出してくるようなこの寂しさをあたしはいつか、忘れよう。

そうしてみんなが飢えることのない、病に怯えることのない村を一日、一日、ずっと先まで積みあげていくのだ。

温泉饅頭を両の手で二つに割ると中身は栗餡だった。

うん、最高。

けれど、今日に限って私の連れはみんな大人しい。

そもそも、大童子と春日が借りてきた猫のように大人しくお茶をすすっていることが異常事態だ。

二人とも実体化バージョンで居座るつもりらしく、先ほど部屋にやってきた仲居さんもきちんと人数分のお茶と菓子を出してくれた。

けれど、いずれも何事か考えごとにふけていて静かなことこの上ない。

特に春日は、どこか遠くの気配を辿るように時折、障子の向こうをじっと凝視している。

突然、武兄がぽつりと漏らした。

「嫌なところだな」

「ちげえねえ」

ふふんと大童子が鼻で笑ったとき、廊下にパタパタと軽い足音が響いた。

続いて『待ちなさい、祐たん』という佐代の声。

とんと襖が開け放たれ、祐太が飛び込んできてまっすぐ大童子に歩み寄るとその背中に隠れた。

「おうい、どうした餓鬼」

さしもの大童子も、驚いたとばかりに首をねじって幼子を見た。

祐太は既に大童子の着物のすそをつかんで、離すもんかといわんばかり。

「わあ、祐たんだめじゃない」

そう言つて、呆れ顔の佐代が襖の隙間から顔をのぞかせた。

「ごめんね。疲れているのに」

「いいよ。でもどうしたの？」

私の問いに少し困り顔の佐代。

祐太はいよいよ持つて大童子の背中に隠れる。

ひどく怯えているような気がするのは、気のせいかな？

「さつきから、祐たんたら女の子がいるって聴かないんだ。気味悪いったら。あ、勘違いしないで、うち別に幽霊旅館じゃないから」

「そうだろうね」

武兄が頷いた。

「ところで、ここ辺りで人が住んでるのってこの旅館だけだね」

「え、ああそうです」

突然の質問に面食らった様子で佐代が頷いた。

武兄。

何を意図した質問だろう、私は飄々とした武兄の顔を観察する。

「初めはこの辺りには村があつたらしいんですけど、交通の便も悪いし、病院は遠いしバスも本数ないでしょ。だから年寄りが住むには不便で。若い人はみんな出て行くし、今ではうちだけになっちゃつたんです。ちっちゃい時は10件ぐらいあつたんですが。仲居さんも実は隣の町から無理言つてきてもらつてて」

「ふうん。じゃあ実質、住んでるは家族だけなんだね」

「はい」

佐代が頷いたときだった。

すぐその廊下で幸代さんの悲鳴が上がった。
何事かと駆けつけると、幸代さんが板張りの廊下でペタリと座り込んでいる。

反対側の廊下から仲居さんたちと石上父がかけてくるのが見える。
どうしよう、どうしようとおつづやいている。

「おねえちゃん。どうしたの？」

佐代が強く言っただけだと、幸代さんはゆっくりと首を左右に振りながら、自ら口にしていることが信じられないというように眉根にしわを寄せて言った。

「隆弘が目の前で、煙みたいに消えちゃった」

居合わせた全員が、それをにわかに信じがたく、言葉がでない。たしかに動揺がお互いの間を埋めている。

「消えるって……」

壁と柱で仕切られた狭い廊下。

しかもここは離れで、客室はここだけ。

消えようがない。

私はバス停からの祐太出現の様を思い出していた。
あんなふうにはわんときえてしまったのか。

後ろで大童子が武兄にいった。

「お前、城山でやってたこと、まだできるか」

「……見くびってんの？」

ブライドの高い従兄弟は不適に笑っているのだろう。

大童子が『まさか』と喉で嗤う。

「だったら、境目さかいめを作っとけ、気休めにはなるだろう」
そして私たちにしか聞こえない声で付け足した。

『気をつける。狩りが始まっているぞ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075f/>

浮生夢のごとし

2010年10月10日21時07分発行